
BASTAR ~闇を狩る者~

水樹ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B A S T A R 闇を狩る者

【Nコード】

N O 5 7 0 B A

【作者名】

水樹ヒロ

【あらすじ】

謎の生物【クリーチャー】による、世界崩壊のカウントダウンが迫るなか…その強大な敵に一人立ち向かう少女がいた。

紅い着物を身に纏い、戦場を駆ける少女…。

その手には、【封魔】と呼ばれる自ら意思を持った一振りの剣があった。

今日も、少女は戦場を紅く染め上げる…。

紅衣着物の少女

西暦2015年9月。

日本から南極の調査に来ていた、とある大学の一団が謎の微生物を発見した。一団は冷凍睡眠状態だったその微生物の調査を開始。大学や国の研究機関も南極へ向かい、調査を開始した。

西暦2016年11月。

東京近郊で正体不明の化け物を目撃する事件が多発。警視庁と防衛庁が合同で調査隊を派遣するも、原因不明。同時期、謎の微生物を研究していた南極調査隊や研究員らが突然、消息を絶つ。

西暦2017年2月。

世界各地に人型の化け物が一斉に現れ始める。国連は異常事態宣言を発令。化け物を【クリーチャー】と呼称し、各国の軍隊がクリーチャーの掃討に乗り出す。異常な繁殖能力を持つクリーチャーにより、半年で発展途上国は壊滅。先進国の各国も自らの領土の防衛に苦戦する。

西暦2019年6月。

先進国もヨーロッパ・アメリカ・ロシア・日本を残して全て壊滅。国連はイギリスに本部を置いた、対クリーチャー特殊戦術部隊『バトル・アシスト・スペシャル・テクニカル・アタック・レンジャー』…通称【BASTAR】を設立。日本にその支部を設立と共に対クリーチャー白兵戦用兵器【封魔】の開発開始。

西暦2020年4月…。

対クリーチャー白兵戦用兵器【封魔】完成。最前線である日本のBASTAR支部へ移送。クリーチャーへの反撃を開始すると、残存する各国に声明を発表した。

そして…現在。

西暦2020年10月…東京・渋谷駅前。

>ザンツ！<

ボロボロのアスファルトに突き刺さる一振りの剣。

クリーチャーの死骸が辺り一面に横たわっている中心に、一人の少女が立っていた。

『周囲にクリーチャー反応無し。掃討完了です。』

剣の鏢に付いている宝玉が光ると、女性の音声で少女に状況を伝えた。

「…部隊との合流時間は。」

『10:30時ですので、まだあと三十分はあります。』

「了解。警戒は引き続き実施…仲間の到着を待つ。」

『了解しました。』

返り血を浴びた顔のまま…血のように真っ赤な着物を纏う少女は剣を握むと、引き抜いて鞘に納めバス停のベンチに座った。

「あの賑やかだった渋谷も、今やクリーチャーの巣窟か。」

>ババババ…<

少女が見上げると、BASTARの輸送ヘリ【BCH-01】がゆっくり降りてきた。

『お迎えが来たようです。』

「みたいね。帰りましょうか…。」

降下してきたヘリに少女が向かうと、自動小銃を手に武装した兵士が一人降りてきた。

「お疲れ様でした。すぐに帰還なさいますか？」

「ええ、全部隊に撤収命令を。」

「はっ！」

少女は指示を出して輸送ヘリに乗ると、ヘリは上昇して池袋方面に飛び去った。

*

*

*

「基地到着は十分後の、10:40時です。それまでごゆっくり。」
武装した隊員が少女に語りかける。

「そうさせてもらっわ。」

少女は剣を抜いて、刃の手入れをしていた。

「【赤き疾風】井上瑠奈。若干18歳でありながら、クリーチャー
掃討数は日本支部で最も多い我らがエース。」

「…ん？」

少女が顔を上げると、彼女より幼げに見えるアメリカ人の少女が笑顔で立っていた。

「封魔の使い手に任命され、BASTAR第一戦闘部隊【】の部隊長となったつ。」

「リイナ？お世辞は止めなさい。」

「はい。」

リイナと呼ばれた少女は瑠奈の隣に座り、彼女が持つ剣を見つめた。

「最初：対クリーチャー白兵戦用兵器って聞いたから、どんなに凄い兵器かと思いきや。」

「見た目は普通の剣ですな。」

一般隊員が取っ手を掴んで、バランスを取りながら封魔を見つめた。

「封魔、調子はどう?」

『非常に良好です。』

「そう。」

瑠奈は封魔を見つめ、初めて微笑んだ。

「先輩は凄いですよねえ?クリーチャーをばっさばっさと斬り捨てちゃうんですから!」

「何を言っているの。5歳でアインシュタインの方程式を解いたIQ250の奇才リイナ・カーディガル。貴女の方が凄いわ?」

「たまたまです、たまたまっ。」

《こちら、BASTAR日本支部グラスハイム。どちらの部隊か?》

「渋谷方面、クリーチャー掃討に出ていた 部隊。着陸許可願います。」

《了解。3番ヘリポートを利用して下さい。》

「着いたみたいですね？」

「そうね。」

瑠奈が窓から外を見ると、巨大なビルを中心に広大な敷地を誇る軍事基地があつた。旧サンシャインシティ及びその一帯を改築したB A S T A R 日本支部、通称【グラスヘイム】である。

「北欧神話に出てくる、戦神の居城がある地か。」

「先輩？」

「ん？…なんでもない。ベルト締めなさい？着陸するわ。」

「はあい！」

輸送ヘリがヘリポートに着陸した後、瑠奈はグラスヘイムのメインビルへ歩いていくとリイナが追いかけてきた。

「先輩はこのまま司令の所へ報告に向かいます？」

「ええ。」

「わかりました。先に、隊のオフィスへ戻ってます。」

「そうして？…うるさい馬鹿の相手、頼むわ？」

「了解です。」

瑠奈はメインビルに入ると、エレベーターで最上階に向かった。顔

をハンカチで拭きながら、廊下を歩いていくと支部長の部屋の隣にある司令官室の前で立ち止まった。

「部隊井上瑠奈、入ります。」

「ん…入れ。」

瑠奈が室内に入ると、窓から外を眺める中年のイギリス人が立っていた。

「帰ったか。」

「はい、クリーチャーの掃討完了しました。 balan・シュノーケル司令官。」

「ふふふ…相変わらず、真面目だな？」

balanと呼ばれた男が瑠奈に振り返ると、彼女の顔を見つめた。

「ん、血で汚れているな？…綺麗な顔が勿体無い。」

「構いません。容姿など気にしては、戦いは出来ませんから。」

「そうか…。」

balanはソファアに座ると、目の前のテーブルに書類を置いた。

「これは…？」

「次の作戦に関してだ。」

「…。」

「申し訳ないが、今度は京都へ向かってほしい。」

「京都…?」

瑠奈は書類を手に取り、目を通した。

「京都祇園のクリーチャー掃討作戦…。」

「そつだ。現在の自衛隊は今までの激戦で疲弊しており、部隊再編成に集中させてやりたい。」

「それまでの時間稼ぎ…ですか。」

「自衛隊の再編が終了すれば、戦いも難民の支援もだいぶ楽になる。彼等が立ち直るまで、我々だけで頑張るしかないのだ。」

「了解しました。では、三時間後にグラスヘイムを発ちます。」

「すまん、よろしく頼む。」

瑠奈が立ち上がって部屋を去ろうとした時、 balan は彼女を呼び止めた。

「瑠奈。」

「はい。」

「帰って来た時くらい、肩の力を抜いてはどうだ？」

「…抜いています。」

瑠奈はそう答えると、軽く頭を下げた後静かに部屋を去っていった。

「感情を殺し、クリーチャーへの復讐に燃える戦鬼か。」

balan はソファアに寄りかかり、天井を見上げた。

「無理もないわい…。あんな事件があれば、誰しもあなるう。」

balan が振り向くと、日本人の老人が室内へ入ってきた。

「これは黒田健一郎支部長…。見苦しいところを。」

黒田健一郎氏： B A S T A R 日本支部【グラス Heim】の支部長である。

「瑠奈はクリーチャーの日本侵攻時、激戦区だった千葉に住んでおった。」

「あの事件が…彼女の命ではなく、人間としての感情を奪った。」

「うむ、可哀想な娘じゃて…。」

エレベーターで降りていく瑠奈。

「瑠奈、体力回復を優先しましょう。」

「ええ、ちよつと疲れた。」

瑠奈はエレベーターを降りると更衣室に向かい、着物を脱いでシャワーを浴びた。

「…気持ちいい。」

シャンプーの泡が足元の排水口に流れるなか、ようやく安堵の表情を浮かべた瑠奈だった。

その後、シャワーを浴びた瑠奈が髪を乾かしていると一人の女性隊員が歩いて来た。

「あら！まだ生きてたの？」

「…それは、こっちの台詞。」

微笑みながら俯く女性隊員。

「相変わらずね。ま、無事で良かったわ？」

「当たり前でしょう。」

瑠奈はバスタオルを彼女に被せ、自分のロッカーに向かった。

「全く…少しは愛想良くできない？」

「私なりにしてるつもり…。」

苦笑いしながら歩み寄ると、女性隊員は瑠奈の頭にバスタオルを被

せた。

「仕方ない娘ね？…そんなんじゃ、男も寄ってこないわよ？」

「恋愛なんか…興味ない。」

B A S T A R の制服に着替えると、着物を手に持ってロッカーを閉める瑠奈。

「感情や思いだけじゃ…誰も救えない。」

「瑠奈…。」

「私は…力が欲しい。クリーチャーを皆殺しにする力が…。」

「…。」

瑠奈は拳を握り締めてそう呟くと、女性隊員に振り返った。

「…じゃあ、失礼するわ。」

「瑠奈っ！」

女性隊員が瑠奈を呼び止めた。

「何？」

「瑠奈は一人じゃないのよ？…それだけは、分かって。」

「…。」

無言で俯くと、瑠奈は振り返って去っていった。

「シグナル隊長。」

シグナルと呼ばれたその女性隊員のところに、他の女性隊員らが集まってきた。

「何？」

「井上隊長って、愛想ないですよねぇ？」

その言葉を聞いたシグナルは、悲しそうに俯いた。

「何も知らない貴女達には、そんな風に見えるかもね。」

「シグナル隊長？」

「なんでもないわ？気にしないで。」

「は……はあ……。」

女性隊員達が首を傾げるなか、シグナルは自分のロッカーのところへ向かった。

『瑠奈。』

「何？封魔。」

『オフィス内から少量の火薬を確認。』

「はあ…また、あの馬鹿か。」

瑠奈が頭をかきながらオフィスに入ると、イヤホンを付けたアメリカ人の男性隊員が机に足を置いて椅子に座っていた。

「オツ、イエ〜…イ!？」

男性隊員の首元に、封魔の刃が不気味に光る。

「この前…オフィス内での武器解体はするな、と言った筈。」

「る、瑠奈〜!ちよっ!わ…忘れてたわけじゃ。」

「レオン・ハイフォード上級戦闘員…上官をファーストネームで呼ぶとはね?」

「ひいっ!井上隊長、ごめんなさいっ!」

「分かれば良いの。」

封魔を鞘に戻し、隊長席へ座る瑠奈。

「全員、13:30時になったらヘリポート入口に集合。」

「先輩、今度はどちらに?」

リイナが笑顔でコーヒーをカップに注ぎながら問いかけると、瑠奈は頷いて答えた。

「今度は、京都へ向かうわ。」

「京都？」

「そう。私達の部隊に御指名があったから。」

「先輩、どうぞ？まだ時間はありますし、コーヒーでも飲んで少しリラックスしてください。」

「ありがとう。」

リイナから受け取ったコーヒーを、ゆっくりと口にする瑠奈。

「リイナちゃん、俺には？」

「自分でやってっ！」

「ちえっ！…ん？そういや、あのぜい肉君はどうした？」

「ウイン・リイ下級戦闘員？そういえば、私も見てない。」

「ったくよお！大事なミーティングの時間にどこ行ってんだあ？」

「…その【大事なミーティングの時間】に、卑猥な本を広げてる奴が言う台詞じゃあないわね？」

「あっ！やべっ！」

机に肘をついて溜息をつきながら瑠奈が言うと、レオンは慌てて本を引き出しにしまった。

「思春期の学生じゃあるまいし…。」

リイナが苦笑いしながらレオンに見る。

「リイナの教育にも悪いし。今後、あまりに酷かったらセクハラで訴えるからそのつもりで。」

「か、勘弁っ！」

レオンが慌てて両手を振るなか、瑠奈はリイナに振り向いた。

「リイナ。後でウィンにも話した事を伝えておいて？多分、ヘリポートでヘリの整備をしてるんでしょうから。」

「はいつ。」

「じゃあ、皆解散して。昼休み後、ヘリポート入口に集合…良いわね？」

「了解ですっ！」

「へいへい。」

「じゃあ、また後で。」

「瑠奈！早速、一緒に飯でも…。」

「…。」

レオンが笑って食事を誘うも、瑠奈は無視してオフィスを出ていった。

「無視…。」

「当然！先輩があんたみたいなのと行くもんですかっ！」

「けっ！…じゃあ、リイナ！一緒に…。」

「い・や・だっ…！」

瑠奈は幹部女子寮の自室へ帰ると、外の景色を眺めていた。

『瑠奈、昼食摂取によるエネルギー回復を。』

「分かってる。」

ベッドの上に着物を投げ、部屋を出ようとした瑠奈は机にある一枚の写真を見た。

そこには、友達と一緒に笑顔で写っている瑠奈の姿があった。

「…佳苗。」

写真を見つめ、目を細めながら呟く瑠奈。

「…！」

その時…瑠奈の脳裏に映像が浮かんだ。

高校の制服を赤く染めた瑠奈が腰を抜かして座り込む目の前で、友達
の佳苗がクリーチャーに追い詰められている。

「た、助けて…瑠奈。」

「あ…ああ…。」

クリーチャーが怯える佳苗へ一斉に飛び掛り、次々と噛みついてい
く。

「うあああっ！！」

「うっ！…だあっ！」

『瑠奈！？』

瑠奈は自ら壁に頭を打ち、その痛みで我に返ると…額から血が流れ
てきた。

『また…例の幻ですか？』

「くっ！…行きましょう。」

瑠奈が額をハンカチで押さえながら、自室を去っていく。

「近頃…また頻繁にアレを見るようになった…何故？」

*

*

*

昼食後、ヘリポートに集まる 部隊のメンバー。瑠奈も戦闘服代わりの紅い着物に着替えると、封魔を腰に差してヘリポートへ向かった。

「おつ、来た来た。我らが隊長さんが！」

肩に自動小銃を担ぎ、レオンが瑠奈を冷やかす。

「隊長つ！ヘリの整備でミーティングの時間を忘れてたツス！」

小太りの少年が慌てて瑠奈の前に立つや、敬礼し謝罪した。

「ウイン…次からは気をつけなさい。」

「はいツス！」

「リイナ、移動中の機内でブリーフィングをしたいのだけど。」

「はい！そう言われると思い、管制室のレイチェルから作戦内容のデータをいただいてきました。」

ミニパソコンを持ち上げ、微笑むリイナ。

「ん…じゃあ、行きましようか。」

「了解ツス！」

ウィンが走っていき、ヘリの運転席に座ると輸送ヘリのエンジンを起動させた。

プロペラが回り、風が吹き荒れる。

「行くわよ。」

瑠奈が髪をなびかせながら歩いていく。

「待ってくださーい！」

リイナも走って瑠奈の後についていく。

「んじゃ、行くか！」

レオンも走って乗り込むと、ヘリの後部ハッチが閉まり機体がゆっくり上昇していった。

西の京都へ向かって飛んでいくヘリの中…リイナが地図を広げ、ミニパソコンを起動させる。

「今回の作戦は、京都祇園に潜伏しているクリーチャーの排除です。」

「祇園かあ！観光で一度芸者つての见到、行った事あんな。」

「レオン、黙りなさい…続けて。」

「ちえっ！」

「はい。クリーチャーは八坂神社から花見小路や新橋通など…広範囲に分散しています。先輩とレオンは、京都上空へ到着次第に降下。八坂神社へ降下後、作戦を開始して下さい。」

「了解っ！…ぜい肉君っ！京都まであとどんくらいだ？」

「あと一時間ちよっとツス。というか！その呼び方、やめてほしいツス！」

「なんだよ？嫌なのか？」

レオンがウインの頭を後ろから掴んで聞く。

「隊長…瑠奈さんの前で、ぜい肉ぜい肉って言ってほしくないんす！」

「ん？そついや、お前…瑠奈に気があんだっけ？」

「呼んだ？」

「い、いえっ！！なんでもないツス！」

瑠奈が振り返って問いかけると、ウインは赤面しながら返事をした。

「…お前、マゾツ気あんだろ。」

「？」

輸送ヘリが京都上空へ差し掛かると、瑠奈が操縦席のウインへ振り返った。

「ウイン、後部ハッチ開放。」

「あーりよ…了解ッス！」

「作戦前よ…ふざけてないで、集中。」

「すみませんッス！」

「へえへえ！」

「先輩、八坂神社上空に間もなく到着！」

「了解。サポート、頼むわね？」

「お任せ下さい！」

「ん…行くわよ？封魔。」

『全システムのチェック完了。問題ありません。』

「了解。」

瑠奈はパラシュートを背負い後部ハッチから飛び降りると、一回転して勢いよく降下していった。

「隊長さんってば、張り切っちゃってよお？」

「レオン！ぐだくだ言っただけで続いてっ！」

「あいよ。じゃあ…いつてくるかねえっ！」

レオンも後部ハッチから飛び降りると、輸送ヘリはハッチを閉鎖し京都上空をゆっくり旋回し始めた。

「CRクリーチャー・リーダー、オン…えっと、先輩！無線聞こえますかっ！」

降下中の瑠奈にリイナが無線を飛ばす。

「…聞こえてるわ。」

パラシュートを開き、勢いを殺してゆっくり降下していく瑠奈がリイナへ返事をする。

《先輩、二時方向にクリーチャーを三体確認。》

「了解。」

《瑠奈。離れて降下すんのか？》

「ええ…あなたに、あまり近くにいてほしくないから。」

《か、可愛くねえ…。》

《あはは！》

八坂神社の境内が近づいてくると、瑠奈はパラシュートを外して参道へ飛び降りた。

「レオン。あんたは、花見小路方向から来なさい。」

《了解っ！》

「…何、ふて腐れてるの。」

無線を帯にあるカバーにしまつと、瑠奈はゆっくり歩きだした。

境内周辺にある木々が、風になびく。

「…。」

鞘に手をやり親指で封魔を押し出す瑠奈の頭上から、飛びかかるクリチャー。

「シャアアアッ！」

「はっ！」

瑠奈が抜刀斬りで軽々とクリチャーを両断すると、目の前の階段からクリチャー二体が涎を垂らしながら歩いてきた。

「クリチャーは…。」

風に髪をなびかせながら、封魔を握り直す瑠奈。

「…皆殺しだ。」

クリチャー二体が瑠奈目掛けて飛びかかった瞬間、木々に隠れて

いたカラス達が一斉に飛び立った。

カチャン…。

刃についた血を払い落として封魔を鞘に納めると、瑠奈はゆっくり歩いていった。

「ん？」

空を見上げると、曇っていてポツポツ雨も降りだしてきた。

「雨…ん？」

瑠奈は近くに壊れた売店を見つけると、歩いて行って和傘を手にとった。

「すみません…傘を一本、いただきます。」

壊れた売店のカウンターに定価分のお金を置き、和傘を開く瑠奈。

「封魔。クリーチャー反応は…？」

『現在、反応無し。引き続き警戒します。』

「お願い。」

瑠奈が雨の中を歩いていくと、遠くで銃撃音がしていた。

「銃撃音…今日はまとも仕事しているみたい。」

「うわぁぁっ！」

「ん？」

瑠奈が振り向くと、レオンが慌てて路地から走って来た。

「レオンッ!？」

「瑠奈っ! やりっ、合流できたぜっ!」

笑顔で走ってくるレオンの背後から、クリーチャーが二体飛び掛ってきた。

「!…レオン、しゃがみなさい!」

「はっ!？」

「返事!」

「わ、分かったっ!」

レオンの背中に飛び乗る瑠奈。

「うおっ!」

「今、上を見たら切り刻むわよ…。」

「見ません…。」

「はぁぁっ!」

レオンを踏み台にして飛び上がると一体のクリーチャーの顔面へ蹴りを…もう一体には廻し蹴りをお見舞いして着地し、間髪入れず落下したクリーチャーへ走っていく瑠奈。

「はあっ！」

横払い…斬り下ろしと二体のクリーチャーを両断すると、瑠奈はレオンに振り返った。

「あと何体っ!?!」

「はあ？」

「あんたが逃げてきた時に追ってきたクリーチャーは、あと何体だっつて聞いているのよっ!」

「最初は八匹いて、その内二匹は撃ち殺した。」

「今、二体倒したから…あと四体か。」

痙攣しているクリーチャーの頭を踏み潰し、瑠奈は封魔を払って血を飛ばし鞘に納めた。

「和傘…。」

先程買った和傘をさして、歩いていく瑠奈。

「瑠奈っ!」

「レオン。あんたは待機！」

「待機だあ!？」

瑠奈はゆっくり振り返って、レオンの自動小銃を指差した。

「クリーチャーにやられて使えないんでしょう?それ…。」

「うっ！」

「大丈夫。あとは、私がやる。」

瑠奈が去っていくと、レオンは苦笑いして頭を掻いた。

「参ったな…全てお見通しかよ。」

レオンを置いて、一人…新橋通りを歩いていく瑠奈。

「…。」

瑠奈を追うように影が気配を殺して、彼女の背後から近づいていく。

「…来た。」

立ち止まり、傘を上へ放り投げると同時に廻し蹴りを放つ瑠奈。

すると背後から走ってきたクリーチャーの顔面に命中し、雨で濡れた地面を滑っていく。

「シャアアッ！」

「!…はっ!」

家屋の壁を突き破って襲いかかるクリーチャーの口に鞘で殴りかかる瑠奈。

『瑠奈。屋根から二体。』

「!…はあっ!」

クリーチャーの口に殴りかかったまま、鞘から封魔を抜いて瑠奈は抜刀斬りを放った。

抜刀斬りで一体を両断するも、もう一体の爪が瑠奈に迫る。

「くっ!両手が塞がって!」

バンツ!

こめかみを撃ち抜かれ、クリーチャーが倒れる。

「今のは!…」

「瑠奈っ!大丈夫か!」

鞘で殴りかかっていたクリーチャーを蹴り倒した後に頭を封魔で突き刺すと、瑠奈は走ってきたレオンに振り向いた。

「レオン。」

「こちとら、元・米軍だ。小銃がやられた時の準備くれえしてらあ
！」

拳銃を構えてレオンが笑う。

「借りを作っちゃったわね。」

「よりもよつて、俺に…てか？」

「ん？…そうね。」

微かに微笑んだ瑠奈を見つめ、レオンは苦笑いすると振り返って拳銃を連射した。

頭と胸に数発浴びて倒れるクリーチャー。

「あと…。」

「…。」

瑠奈は血に染まった封魔を払い、クリーチャーと睨みあった。

雨が封魔と瑠奈を濡らす…。

「シャアアアツ！」

走ってくるクリーチャーに対し、身構えずそのままの態勢で待つ瑠奈。

「…はっ！」

瑠奈が封魔を振り下ろすと、背後でクリーチャーが斜めに両断され、真つ二つになった。

「終わりか…。」

「この辺りはね…リイナ！」

《はい、先輩！》

瑠奈は通信機で上空を旋回中の輸送ヘリに無線を送った。

「ウインに、八坂神社へ着陸出来るか聞いてくれる？私の隣にいる馬鹿が自動小銃を壊してしまつて、戦力にならないから。」

「瑠奈…。」

《了解しました。》

「サンキュ、瑠奈。」

「あんたも一応…隊の戦力だからね。」

「そうかい。」

レオンは微笑んで和傘をさすと、雨で濡れた瑠奈に歩み寄った。

「もう…必要ないわ。」

「そう言うなつて。大事な隊長様に風邪などひかれては困ります。」

「ふん…お調子者。」

瑠奈はレオンにそう呟くと、渋谷傘に入って二人で歩いていった。

二人が八坂神社に到着すると、既に着陸していたへりからリイナが顔を出した。

「?…リイナ。」

「ふふふ!お二人共々?もう雨、上がってますよ〜!」

「ん?…おっ、マジだ。」

「レオン、離れなさい。」

「へえへえ!」

苦笑いするレオンと共に、瑠奈は笑顔で手を振るリイナの所に向かった。

*

*

*

レオンはウィンから自動小銃を受け取ると、肩に担いでへりから降りてきた。

「レオンは周囲の警戒。」

「了解。」

「リイナは、封魔の点検をお願い。ウインはへりの離陸準備を。」

「了解ッス！」

『よろしくお願いします。ミス・リイナ。』

「はいはい！」

へりの中に置いてある封魔専用の点検機材に封魔を収納してリイナが操作し始めると、瑠奈も後ろで腕組みして立っていた。

「…どう？」

「うん…あ。」

リイナがモニターを指差した。

「一部、回路に異常を見つけました。一旦、ガラスヘイムに帰った方が良さそうです。」

「…分かった。ウイン、離陸出来る？」

「もちろんッス！」

「レオン、離陸するわ？…へりに戻りなさい。」

《あいよっ!》

レオンがへりに乗り込むと、プロペラを勢いよく回転させながら輸送へリが上昇していった。

「リイナ。」

「はい?」

「グラスヘイムに着くまで、仮眠をとるわ?着いたら起こして。」

「了解しました!ごゆっくり。」

瑠奈は最後尾の席に座り、脚を組むと…静かに目を閉じた。

そんな瑠奈を見ていたレオンは、静かにリイナの所へ行った。

「寝顔だけ見てるとよお…普通の女の子なだけどなあ?」

「そっか、レオンは知らないんだ…。」

「ん?」

「先輩…クリーチャーが日本へ攻めてきた時、目の前で友達を殺されたの。」

「!…本当か?」

レオンが聞き返すと、リイナはモニターを睨みながら頷いた。

「うん。目の前で友達がクリーチャーに食べられちゃったらしいの…。」

「…よく助かったな？あいつ。」

「たまたま、 balan 司令が戦闘中にその場へやって来て助けてくれたらしいの。でも、それ以来…先輩の心は閉じられたまま。」

「そうか…。」

レオンとリイナが眠っている瑠奈を見つめる。

「先輩のあの性格は…親しくなった誰かを失いたくないだけなのかもしれない。大切な人を失う辛さを、痛いほど経験したから。」

「…俺にやあ、ただの現実逃避にしかみえねえな？」

「レオン…世の中には、貴方みたいに心の強い人間ばかりいるわけじゃないんだよ…。」

「…確かに、な。」

「…。」

陽も暮れて、オレンジ色の空をへりが東へ向かって飛んでいくと…暫くして、ようやく都市部の輝きが見えてきた。

「グラスヘイムまで、あと少しだなっ。」

「私…先輩、起こしてくる。」

「ああ。ぜい肉君、安全運転で頼むぜっ?」

「その呼び名、やめてって言ってるじゃないッスか!」

「…うう。」

その頃、瑠奈は一人うなされていた。

「助けてって言ったのに…。」

「か、佳苗。」

「見殺しにするなんて…。」

暗闇の中…血みどろの佳苗が、瑠奈にゆっくり歩み寄ってくる。

「なんで助けてくれなかったんだよ?お前だけ、のこのうと生きて…恨めしいよ。」

「ち、違う…私だって助けたかった!」

佳苗が瑠奈の両肩を掴む。

「あたいを…見殺しにしてえ!」

「…違うっ!!私は見殺しになんかしてないっ!」

「きゃあっ!」

飛び起きた瑠奈の叫び声に驚いて、尻餅をつくりイナ。

「はぁ…はぁ…」「ごめん。」

「大丈夫ですか？先輩。だいぶうなされてましたけど…。」

「平気…もうグラス Heim に？」

「はい。」

「了解。」

瑠奈は外を見ると、グラス Heim のメインビルが大型照明で照らされていた。

「ウィン、着陸態勢。」

「了解ッス！」

「瑠奈、本当に大丈夫か？」

「大丈夫って…言っているでしょう。」

瑠奈は俯くと、悲しそうな表情を浮かべていた。

グラス Heim のヘリポートで誘導員が合図を送るなか、ウインの操縦する輸送ヘリがゆっくり降下してきた。

「着陸したッス。」

「お疲れ様。皆、次の命令があるまで通常勤務。」

「先輩、封魔を。」

リイナの差し出した封魔を腰に差す瑠奈。

「ありがとう。私は研究室に行く。何かあった時は携帯に連絡を。」

「はい。」

グラスヘイムのメインビルに入ると、瑠奈はエレベーターに乗って地下の研究室へ向かった。

「失礼します。」

「ん？瑠奈、どうかしたの。」

白衣を着た三十代の女性が瑠奈に優しく微笑んだ。

彼女の名は、和田玲子教授。グラスヘイム研究室の最高責任者である。

「和田教授、封魔のメンテナンスよろしいですか？」

「構わないわ？座ってなさい。」

「はい。」

和田教授に封魔を手渡し、近くにあった椅子に座る瑠奈。

「瑠奈。シグナルが心配していたわよ？」

「また…ですか。」

「歳も近いし、心配なのよ？お姉様肌だしね。」

「私にはお高いお嬢様のように見えますが…。」

「ふふふ！…ん？なるほど、エネルギー供給部分に異常、か。リイナちゃん、さすがね？」

「リイナ、ですか？」

「彼女から前以て連絡があったのよ。封魔の回路に異常発見って。」

「そうでしたか。」

「リイナちゃん…貴女を姉のように慕ってるみたいだし、優しく接しなさい？」

「努力します…。」

「…失礼しますわ？」

和田教授と瑠奈が会話をしていると、研究室にシグナルがやって来た。

「シグナル。瑠奈が来ているわよ？」

「あ、瑠奈。」

「…。」

「どうしたの？何かあった？」

「な…何でもない。」

「ふふふ。恥ずかしいのよ。」

「ち、違いますっ！」

「良かった、無事で！心配したんだから。」

「あ、ありがとう。」

「あじう。」

「あっ。」

「？」

「何でもないわっ、ねえ？シグナル。」

「はいつ。」

「な、なんですか？私だってお礼くらい言います。」

「ふふふ、そうね。」

「瑠奈！最近、一階の喫茶店に美味しいケーキを見つけたのよ。」

緒に行かない？」

「ケーキ？」

「封魔のメンテナンスもまだ時間かかるわ？行ってらっしゃい。」

「は、はあ……。」

「瑠奈、早く早く！」

「ちよっ…シグナル！手引っ張らないで。」

シグナルが瑠奈の手を掴み、走って研究室を出ていく。

「やれやれ。瑠奈も、もう少し心を開いてくれれば良いんだけど。」

和田教授がキーボードを操作していると、眉をピクツと動かした。

「何？…このシークレットは。」

調べていくと、0と1の数式が画面一杯に現れた。

「な…何。」

慌ててキーボードを操作する和田教授。

「操作不能！？…何なのかしら。」

すると、数式が消えた後…モニターに一人の女性が現れた。

「じ、これは…。」

和田教授はモニターの女性を見つめ、啞然としていた。

『天之女神あまのめがみ…それは、日本神話に記されなかった幻の神。』

「天之女神？…この封魔には、まだ多くの謎がありそうね。」

和田教授がそう呟くと、女性の姿は消え…【井上瑠奈】と画面中央に表示された。

「どうして当時B A S T A Rに入隊していなかった瑠奈を、封魔が使い手に選んだのか…そこから謎を解かなくてはならないわね。」

その頃、喫茶店の前でメニューを見つめるシグナルと瑠奈。

「これこれ！」

「…このケーキ？」

「そう！女性隊員の中で噂になってるのよ！」

「よく…わからない。」

「あれ？先輩？」

瑠奈とシグナルが振り返ると、リイナが笑顔で立っていた。

「リイナ。貴女もケーキ目当て？」

「はい！噂を聞いて。先輩達もですか？」

「そうなの！一緒に食べましょ？奢るわよ。」

「本当ですか？じゃあ、ご一緒させていただきま〜す！」

「ふふふ…瑠奈、もう逃げられないわね？」

「もう…好きにして。」

頭をかかえる瑠奈を見て、シグナルとリイナがハイタッチした。

「ん？…あ！もしや、最初から仕組んでたのね！？」

「まあまあ…！」

「固い事は言いつこなしで！」

「ちよ、ちよっと…！」

シグナルとリイナに腕を組まれ、無理矢理喫茶店へ連れ込まれる瑠奈だった。

一方、和田教授は封魔の点検と謎の解明を続けていた。

「B A S T A R 総司令本部【Noaノア】から貰ったデータによると…【封魔】の製造元は、Noa特殊兵器開発局。設計・開発責任者は…！！…アリナ・イノウエ！？」

和田玲子教授がパソコンのモニターを見て驚き、思わず立ち上がった。

「瑠奈の…母親だったの？亜里奈が…。」

和田教授は、データを更に確認していく。

「封魔の変形機能？太刀型可変形態【正宗】に、薙刀型可変形態【青龍】…大剣型可変形態【天村雲あまのむらくもの全3種へ変形が可能。」

教授は目を閉じてゆっくり俯くと、暫く考えた後…顔を上げた。

「この機能を使えば、Noaはきっと封魔の実戦データを欲しがるけどそれは…瑠奈に危険な目に遭えと言っているようなもの…。」

キーボードに手を伸ばす和田教授。

「瑠奈の、あの娘の身を守るには…。」

モニターにデータ削除の問いが表示されると、Enterキーへ指を伸ばす和田教授。

すると、点検機材の中に入っていた封魔が突然輝きだした。

『瑠奈は…私が守ります。』

「封魔!?!」

シグナルやリイナと喫茶店にいた瑠奈が、突然立ち上がった。

「どうしたの？瑠奈。」

「ケーキ、美味しいですよ？」

「ごめん。封魔が…私を呼んでる気がする。」

「え？」

「行かなきゃ！」

「瑠奈！ちよっ、ケーキはっ！？」

「あげるっ！」

「あげるって…。」

「じゃあ、私が〜！」

瑠奈のケーキにフォークを伸ばすリイナ。シグナルも自分のフォークを瑠奈のケーキに伸ばした。

「むっ！」

「んっ！」

二人が睨み合っている頃、瑠奈は階段を駆け下りるや研究室に走っていった。

「教授っ！」

「瑠奈！どうしたの？血相変えて。」

「ふ…封魔が、私を呼んだ気がして。」

『瑠奈。』

「封魔！」

瑠奈は慌てて機材に駆け寄り封魔を取り出すと、思わず抱きしめた。

「封魔。大丈夫？」

『はい、システム・オールグリーン。いつでも戦闘可能です。』

「良かった…。」

「ちょっとだけ、封魔をバージョンアップさせてあるわ？」

「バージョンアップ？」

「そう。正確には、封魔が自分でバージョンアップしたんだけど。」

「封魔が…？」

「私も驚いているわ…意思を持ち、使い手と共に成長する武器なんて。明らかにオーバーテクノロジーよ…。」

「封魔…。」

『瑠奈？口にクリームがついています。』

「え？…あ、慌ててたから。」

「ふふふ！息も合ってるし、心配ないかしら？」

「…頑張ります。」

瑠奈は封魔を見つめて優しく微笑むと、その笑顔に應えるように封魔の宝玉も光り輝いた。

*

*

*

深夜… B A S T A R Rの攻撃ヘリ【B B H - 0 2】が夜空を飛んでいく。

現在の日本はクリーチャーから一般市民を守るという意味合いも兼ね、深夜の外出を老若男女問わず緊急時を除き禁止していた。

そんな無人と化した東京上空を、B A S T A R Rのヘリが飛んでいく。

「今日も異常無しか…。」

「暗くて良く分かん。もう少し、高度を下げてください。」

「大丈夫か…？」

「暗視ゴーグルを忘れてきたからな？直に見るしかない。」

「仕方ない、分かったよ。」

ヘリが旋回してビルの合間を飛んでいくと、副操縦席の隊員がライトを操作しながら異常の有無を確認していく。街灯がところどころ点いてはいるもの…周囲のオフィスビルは無人の為、真っ暗だった。

「クリーチャーの姿はないか。」

「今日も異常無し。いい事じゃないかつ。」

操縦席の隊員がそう呟いた瞬間だった。一定の距離で点いていた街灯が突如として消え、周囲が突然真っ暗になった。

「なっ!?!」

「お、おいっ!!ま…前っ!」

副操縦席の隊員が、真っ正面にあるビルを見て思わず叫んだ。

「だ、駄目だ!避けきれない!」

「う…うわあぁっ!!」

ビルに激突し、大爆発するB A S T A Rのヘリ。

燃えながら破片を撒き散らし落下するへりの遙か後方では、車道にあるマンホールの蓋が開き…クリーチャーが赤い目を光らせていた。

翌日…。

「あつちやあ〜！ひでえな、こりゃあ。」

事故現場に、瑠奈達… 部隊の姿があった。

「鑑識班は、墜落したへりの調査へ向かって下さい。」

「了解。」

リイナが鑑識班の隊員達へ指示を出すなか、警察が墜落したへりの周辺に立ち入り禁止のテープを張っていく。

「墜落ツスか…いつ見ても嫌な風景ツスね。」

「そうね。」

瑠奈はウインを連れて現場を見て回っていると、リイナが走ってきた。

「先輩。」

「リイナ、何か分かったかしら。」

「管制室のレイチエルからですが、墜落したへりがレーダーから口ストした時間と同時刻にこの地域一帯で、原因不明の電圧上昇を確認したと連絡がありました。」

「電圧上昇？」

「はい。調べてみたところ…確かに周囲の信号や各オフィスの電気系統が完全にやられていますね。」

「よく電気火災が起きなかったツスね？」

「私もそこが引つかかっているの。」

ウィンとリイナが話していると、瑠奈は辺りを見回した。

「どうやら…ただの墜落事故じゃ、済みそうにないわね？封魔、ク
リーチャー・サーチ。」

『了解。周辺十五km圏内をサーチします。』

「そこまで広くなくていい…範囲を十kmに変更、サーチして。」

『了解しました。調査範囲を十kmに修正。』

瑠奈が腰に手を置き、周囲を見回した。

「周囲はビル群…潜伏しようと思えば、どこへでも隠れる事が出来る。」

『周囲五km、反応無し。』

「この辺りには、もういないか。」

瑠奈が辺りを見渡していると、ウィンが付近にあった地下へ続く階段を指差した。

「ん？…リイナさん、あれって地下鉄ツスカ？」

「え？…あ、そうそう！東京メトロの駅だよ。東京の地下を走っててね？今じゃ朝から夕方までの運行になっちゃったけど、都市部で働く人達の大事な交通手段だよ。」

「なるほど。」

「地下鉄…地下、か。」

『瑠奈。周囲十kmにクリーチャーの反応はありません。』

「封魔、地下ってサーチ出来る？」

『現在のクリーチャー・サーチシステムでは不可能です。バージョンアップが必要となります。』

「そう…了解。リイナ！」

「はいっ！」

「鑑識班の警護は 部隊に任せ、私達はグラスホームへ帰るわよ？」

「了解しました。」

リイナがウィンを連れてBASTARの車両へ向かうと、レオンが瑠奈に歩み寄った。

「瑠奈、ちよつといいか。」

「レオン…何かしら。」

「いやな？…あの車道にあるマンホール。あの蓋によお、鋭利な爪か何かで引つ搔いたような痕があんだ。」

「マンホール？」

「ああ、ついてきてくれ。」

レオンは瑠奈を連れて車道の真ん中にあるマンホールの付近まで行くと、その蓋を指差した。

「あれなんだけだよ。」

瑠奈は近寄って、マンホールの蓋についている痕に触れてみた。

「確かに…。」

『瑠奈。そのマンホールの蓋から微弱のクリーチャー反応を感知。』

「！…やはり、クリーチャーが近くにいたのね。」

「けどよ…クリーチャーがどうやってへりを墜落させたんだ？」

「それは分からないわ？…だから、一度ガラスヘイムに帰るのよ。」

「帰ってどうすんだ？」

「地下に潜伏しているのは分かった…なら、奴等の住処を探らないといけない。」

「ここにいっても、何の資料もねえし…仕方ねえか！」

「分かったら、さっさと撤収準備なさい。グラスヘイムまで走らせるわよ？」

「そ…それは、勘弁っ！」

ウィンが運転してきたB A S T A Rの車両へ瑠奈が乗り込むと、レオンも慌てて飛び乗った。グラスヘイムへ帰った瑠奈達は一旦、休憩を取りにオフィスへ向かった。

「だからよお…へりはなんで墜落したんだ？」

「それを、これから調査するんじゃない。」

「そっツスよ。」

「俺は今知りてえんだよ！」

レオンの後ろを通り…オフィスのシンクの向かいにあるブレイカーへ手を伸ばす瑠奈。

「ん？」

「先輩？」

「…。」

バンツ！

瑠奈がメイン・ブレーカーを切ると、オフィスが真っ暗になった。

「きゃっ！？」

「た、隊長！？」

「瑠奈！お前、いきなり何を…あだっ！」

オフィスにレオンの叫び声が響き渡ると、室内に光りが戻った。

「…分かった？これが原因。」

瑠奈がそう言うと…レオンが額を必死に摩っていた。

その足元にはペンが転がっている。

「な…何がだあっ！？」

「分からない？あのへリには赤外線カメラとか…視界が悪い際に使う機材が見当たらなかった。だから、サーチライトと肉眼で搜索しないといけなかった。」

「！…なるほど！」

「リイナは分かったようね？…そのペンは、へリと見立てて投げただけ。」

「俺はビルかよ…。」

「な…何がなんだか、さっぱりッス。」

リイナは啞然とするレオンとウィンに振り向き、笑顔で説明を始めた。

「つまり！急激な電圧上昇によって街灯が全て消え、辺りの暗さに操縦者の目が慣れる前にへりはビルに激突した…てわけですね？」

「その通り。夜間巡回時における携帯装備品の暗視ゴーグルさえ、彼らは所持してなかったんじゃないかしら…激突して当たり前ね？」

「なるほどな…ん？ちよつと待て！じゃあ、さっき俺にペンを思いきり投げなくても、説明出来たんじゃねえか？」

「あら。今更、気がついた？」

「か…可愛くねえ…ホント。」

「たははは…ですが、へりの墜落した原因は判明したとはいえ。」

「地下に潜むクリーチャーを倒さないと同じ事の繰り返しッスね。」

リイナとウィンがそう言うと、瑠奈は自分の机にあるパソコンの電源を入れた。

「そろそろ、かな。」

「何がツスカ？」

「管制室からちよつと、ね。」

ピピッ！

「きた。」

椅子に座ってパソコンを操作する瑠奈。

「先輩？何を…。」

「リイナ。管制室から、東京の全地下鉄の路線図を送ってもらったから転送するわ？」

「！…それを使って、クリーチャーの潜伏していそうな地域の特定と次の行動パターンを分析…ですね？」

「理解力がある娘で助かるわ。頼むわね？」

「了解です。」

「レオンとウインは出撃準備。いつでも出れるように。」

「あいよっ！」

「了解ッス！」

リイナが笑顔でパソコンと向かい合う。

「さあつて！悪さをしたイケナイ子はどこかなあ？」

リイナがキーボードを凄い速度で操作していく。

「東京で地下鉄が密集する地域は結構ありますから、まずは範囲を絞らないと…。」

瑠奈がリイナの後ろに立ち、腕組みしながらモニターを見つめる。

「どっ…？」

「あとちょっと…。」

リイナのキーボードを操作する手が急に止まった。

「…どうかした？」

「先輩…クリーチャーは電気を使いますよね？どこかに電力を極端に使用する、若しくはかつて大量に使用していた場所ってありますか？」

「ちょっと待って？」

「この範囲内で…なら、どうですか？」

必死に考える瑠奈に、リイナがモニターに映る飯田橋から水道橋付近を指差して問いかけた。

「ん？…そのエリアなら後樂園ね。」

「コウラクエン？」

「ええ…ちょうどこの辺り。飯田橋と水道橋の中間よ…やや北寄りだけ。」

「その後楽園に、何か大型建造物ってありますか？」

「東京ドームというドーム球場があるわ？」

「！…そこですっ！その後楽園を中心に範囲を限定！」

瑠奈もリイナの肩に手を置いて、モニターを見つめる。

「ヘリが墜落したのは、確か…。」

「あそこは確か…御茶ノ水よ。その先の東京駅は昼間、大勢の人が行き来する。」

「警戒してきつとクリーチャーは近寄りませんね…ならっ！」

リイナがEnterキーを押すと、一本の路線が点滅した。

「出ましたっ！奴等は丸の内線を進攻中と推測っ！」

「襲撃予定は分かる？」

「待つてください…丸の内線を辿っていくと、重要施設があるのは…えっ！？」

ある駅を見て、瑠奈とリイナが驚く。

「！…可能性が一番あるのは、そこね。」

「はい…。」

「よくやったわ、リイナ！さすがねっ！」

「いえいえ！…ここからは、先輩達のお仕事です！」

「分かってる。」

瑠奈は微笑んでリイナの頭を撫でると、ハンガーに掛けていた着物と封魔を持ってオフィスを出ていった。

「先輩！私は、グラスヘイムからフォローします！」

「お願い！…レオン、ウイン！出撃するわよ！」

「待つてましたあっ！」

「準備完了しているッス！」

「で…クリーチャーは次にどこ行くんだ？」

「霞ヶ関、そして国会議事堂よ…。」

「！…日本の国家中枢を狙ってるんスか！？」

「おいおい、意外と大胆な奴等だな！」

レオンとウインが驚いているなか、リイナから連絡が入った。

《先輩！ヘリが落下して、かなりの時間が経過しています！経過時間とクリーチャーの予想される平均移動速度で計算した結果：現在、日比谷辺りにクリーチャーがいると推測しますっ！時間はあまり残っていません、急いでください！》

「了解！…二人とも、いつまでも喋ってないで行くわよ！」

「あいよー！」

「了解ッス！」

*

*

*

「きゃあー！」

「ク、クリーチャーだあ！」

地下鉄の駅で電車待ちをしていた大勢の一般人がクリーチャーに襲撃され、惨殺されるなか…日比谷通りを低空飛行で飛んでいくB A STARの輸送ヘリがあった。

「ヘリのメンテ、ぎりぎり間に合ってたッス！」

「ウインー！」

「了解ッス！飛ばすッスよーっ！」

へりが猛スピードで、旧皇居跡の上空を通過していく。

「皇居跡…あとちょっとね。封魔、エネルギーを私の脚部に。」

『了解しました。封魔エネルギー、瑠奈の脚部に蓄積。』

瑠奈の足が赤いエネルギーに包まれると、レオンが心配そうな表情で問いかけた。

「瑠奈、何する気だよ！おいっ！」

「ウイン、速度このまま！後部ハッチ、オープンッ！」

「へっ！？」

驚いて振り返るウイン。

「『へ？』じゃないっ！出来るの出来ないの、どっちっ！」

「りよ…了解ッス！」

瑠奈の怒声に圧倒されたウインが開閉スイッチを押すと、輸送へりの後部ハッチがゆっくり開放されていった。

瑠奈は地上を見て車がないのを確かめると、レオンが苦笑いしながら問いかけた。

「ま…まさか、瑠奈？お前…。」

「その…まさかよっ！」

瑠奈は猛スピードで飛行しているへりから車道へ飛び降りると、土煙を上げながら踏ん張って勢いを殺し何とか着地した。

「ふう…さて、地下鉄は。」

『瑠奈。前方にある日生劇場及び帝国ホテル間の地下に丸の内線を通っています。』

「了解。」

瑠奈が走っていくと、マンホールから次々にクリーチャーが姿を現した。

「封魔っ！」

『了解。通常モードから戦闘モードへ移行。』

飛びかかってきたクリーチャーの顎を蹴り上げると、廻し蹴りで蹴り飛ばす瑠奈。

「はあぁっ！」

抜刀斬りで一体を両断し、後ろから迫って来たもう一体を頭から真っ二つにした。

「次から次に、ぞろぞろとっ！」

クリーチャーが爪を光らせて斬りかかってくるも、瑠奈は鞘で弾いてクリーチャーの首を切り落とした。

『瑠奈。近隣に、およそ百体のクリーチャー反応を確認。』

「百!?!…きゃあっ!」

クリーチャーに後ろから蹴りを受けて吹き飛ばされるも、地面に手をついて反転し踏ん張る瑠奈。

「こんな雑魚に苦戦してる場合じゃない!」

瑠奈は再び斬りかかると、クリーチャーの爪をしゃがんでかわし胴体を両断した。

「邪魔っ!」

瑠奈が物凄い勢いで倒していくと、クリーチャーが徐々に後退を始めた。

「逃げるっ!?!」

瑠奈が走っていくと、アスファルトを突き破って地下から現れた電撃が彼女目掛けて襲いかかった。

「しまっ…きゃあっ!」

まともに電撃を食らい、身体中から煙を上げて四つん這いになる瑠奈。

「くっ…油断した。けど、逃がすわけにはいかない！」

瑠奈がよろめきながら必死に立ち上がると、アスファルトを突き破って飛び出てきた腕が彼女の足を掴んだ。

「何！？…きゃあああっ！」

その腕が電気を放つと、瑠奈の全身に電流が走った。

「うあああっ！…ぐっ！」

封魔を持ち換えて、アスファルトに突き刺す瑠奈。

「はあ！はあ！はあ！」

片膝をついて息を切らす瑠奈の前に、地面から全身に電気を帯電しているクリーチャーの亜種が姿を現した。

両肩と額に角を生やしたクリーチャーは、瑠奈を見るや片手に電気を蓄電し始めた。

「くっ…。」

「グアアアアア！」

クリーチャーが電撃を放つと一直線に瑠奈へ向かっていく。

「はあ！はあ！はあ！…ふ、ふふふ。」

電撃が迫るなか、微笑む瑠奈。

「待っていたのよ…お前が地下から出てくるのをねえ！」

瑠奈は紙一重で電撃をかわすと、クリーチャー目掛けて走りだした。

「はああっ！」

瑠奈が封魔で斬りかかると、クリーチャーは両腕をクロスして身を防いだ。

「！…刃が通らないっ！？」

封魔の刃を弾かれ…瑠奈が驚いていると、突然クリーチャーの足元にヒビが入った。

「今の一撃を受け流した際の衝撃で、道路にヒビが…きゃあっ！」
地面が陥没し、地下鉄の路線へ落下する瑠奈。

「くっ…。」

瑠奈がゆっくり立ち上がった直後、クリーチャーが背後から彼女にリアットをお見舞いし…そのまま壁に叩きつけた。

「ああっ！…うわあっ！」

顔を掴まれ、地面に叩きつけられる瑠奈。

ミシミシミシ…

クリーチャーが手に力を入れると、瑠奈の頭蓋骨から骨の軋む音が響く。

「あああつ！」

瑠奈がクリーチャーの腕を掴んで必死にもがくも、馬鹿力でなかなか外れない。

「きゃあああつ！…くうつ！」

壁に叩きつけられた際に落とした封魔を手探りで探すと、右手に封魔の柄が当たった。

「！…だああつ！」

封魔を胸に突き刺されて、絶叫するクリーチャー。

「たあつ！」

瑠奈は胸に突き刺さっている封魔の柄を思いつき蹴飛ばすと、封魔の刃がクリーチャーの胴体を貫通した。

「グアアアアツ！！」

「うつ…。」

額を掴み、頭を左右に振る瑠奈。

「やってくれるじゃない…たまには手応えあるのとやりたかったし、

ちょうど良いわ。」

胸に突き刺さっている封魔を一気に引き抜く瑠奈。

「さあ…続けましょうか！」

血を払い、封魔を構える瑠奈。

クリーチャーも帯電しながら、ゆっくり立ち上がった。

「グアッ！」

クリーチャーが次々と電撃を放つ。

瑠奈はバックステップで電撃をかわしながら、様子を伺っていた。

《先輩！リイナですっ！》

「リイナ、どうかした？」

《先程、霞ヶ関の各省庁付近にクリーチャーが出現！レオンとウィ
ン…並びにシグナル隊長率いる 隊と 隊が交戦に入りました！》

「！……始まった！」

《先輩は今どちらに！？》

「私！？…私は、昨夜のへりを落としたクリーチャーとデート中よ
っ！」

電撃をかわしながら、柱の影に隠れる瑠奈。

《だ、大丈夫ですかっ!?!》

「ビリビリして、凄いわよ?」

《先輩?ぶっ…あはは。》

「何?」

《先輩も…たまには、冗談言っんですね?》

「冗談言いたくもなるわっ!…くっ!」

封魔の刃を弾いたクリーチャーの豪腕が、裏拳で柱を横から粉碎する。瑠奈は飛び退いて難を逃れるも、クリーチャーは振り返り…叫びながら殴りかかってきた。

「ぶっ!」

左足を後ろに引いて半身反らすと、拳の脇を通るように避けて封魔を構える瑠奈。

「…バクイ!」

瑠奈は笑顔でそう言いながらクリーチャーの首を斬りつけると、クリーチャーの頭がゆっくりと地面に落ちた。

「ふう…もうデートはお終いかしら。」

瑠奈は封魔の刃に付いた血を払ってから鞆に戻すと、頭上を見上げた。

「高いし、戻れそうにないわね…。このまま、線路に沿って行くしかないか。」

瑠奈は、やむなく線路を走っていくと…遙か後ろから何か走ってくる音が聞こえた。

「何？…緊急時の際、関東一円の路線は運行を中止する事になっている筈。」

瑠奈が線路上に立つて後ろを見つめていると…直に大きな影が迫って来た。

「…えっ!?!」

瑠奈が絶句したのも、無理はない。

巨大な芋虫のクリーチャーが、うねりながら迫って来たのだ。

「じょ…冗談じゃないわっ!?!」

瑠奈は慌てて走り出すも、距離はどんどん縮まっていく。

「こっぴなったら!」

瑠奈は封魔を鞆のままの状態で突きの構えをすると、クリーチャーの鼻先に封魔を押し当てて棒高跳びの要領で飛び上がり、身体の上に乗った。

「足場、最悪ね…ん？きゃああ！」

突然、地面を突き破り芋虫のクリーチャーが地上に姿を現すと、通りの先に国会議事堂が見えてきた。

「速い…このままだと国会議事堂まですぐに…ん！？」

後ろから飛んできた電撃をしゃがんでかわす瑠奈。

振り返ると、さっきのクリーチャー亜種が頭部を脇に抱えた姿で身構えていた。

「まだ生きていたの。しぶといわね？」

瑠奈は振り返って足を踏ん張ろうとするも、弾力性のある芋虫クリーチャーの身体が彼女の自由を奪う。

「くっ…タイムリミットも僅かだし、どうすれば！？」

瑠奈が困惑していると…封魔の宝玉が光り輝いた。

『瑠奈。』

「封魔！…さっきから喋らないし、壊れたかと思ったわ？」

『あの程度の電力を受けたくらいでは、私はびくともしませんよ。』

「言っじゃない！…封魔、何か打開策はあるかしら？」

『はい、私にお任せ下さい。第一可変形態【正宗】の使用を推奨します。』

「…正宗？」

『私の可変プログラムの一つです。刀身が長い太刀形態に変形します。』

「面白いじゃない…。」

瑠奈は笑顔で封魔を横に払うと、力一杯叫んだ。

「正宗っ、起動！」

『了解しました。第一可変形態【正宗】起動します。』

封魔の刃が分解し太く長い刃へと再構成されていくなか、瑠奈が柄を引っ張ると柄自体が伸びて倍の長さになった。

肩幅に柄を掴み、瑠奈が勢いよく振りかぶると刃の再構築が完了した。

『流華一閃、スタンバイ。』

「流華一閃？」

『刃にエネルギーを蓄積し、それによって生じた真空波で敵を吹き飛ばす必殺技…といったところです。』

「いいじゃない！今の気分ピッタリよ！」

瑠奈が正宗に変形した封魔を振りかぶり、刃にエネルギーを蓄積し始めると…クリーチャーも右手に蓄電し始めた。

「流華一閃…か。」

「グアアアアア！」

クリーチャーが凄まじい電撃を瑠奈に目掛けて放った。

「はぁあっ！」

瑠奈が封魔を掴んで意識を集中した瞬間、刃に赤いエネルギーが宿った。

「邪魔あつ！」

瑠奈が封魔を振ると、巨大な電撃が一瞬で消え去った。

「くらえっ！」

瑠奈は封魔を振りかぶると、クリーチャーを睨みつけて力一杯叫んだ。

「流華…一閃っ！」

瑠奈が勢いよく赤い真空波を放つと、クリーチャーは跡形もなく吹き飛ばしていった。

「流華一閃か…せせらぎを流れる華のごとく、美しくそして儂い破

滅の真空波…いい名前ね。」

瑠奈が笑顔でしみじみ言っていると、封魔の宝玉が光り輝いた。

『瑠奈、まだ終わっていませんよ?』

「そっか、この気味悪い芋虫クリーチャーも…。」

封魔を頭上で持ち替えて、振りかぶる瑠奈。

「やらなきゃいけないわねっ!」

瑠奈は勢い良く、封魔を振り下ろした。

「流華一閃っ!はああ!」

クリーチャーが国会議事堂の正門を破壊した直後、全身から赤い光を放って大爆発した。

「先輩!?!」

上空からB A S T A R Rのヘリがゆっくり降下してくると、後部ハッチが開いてリイナが慌てて外を見渡した。

「先輩…先輩っ!」

《…聞こえてるわよ。》

「!…あ。」

リイナが涙目になって微笑むと…爆煙の中から、封魔を鞘に納めながらゆっくり歩いてくる瑠奈の姿を見つけた。

「先輩！」

輸送ヘリが着陸すると、リイナは瑠奈に駆け寄って笑顔で抱きついた。

「よかった！先輩、無事だったんですね！」

「当たり前よ。霞ヶ関の方は？」

瑠奈が問いかけると、リイナは涙を拭きながら笑顔で報告した。

「先程、グラスヘイムにシグナル隊長から連絡があり…殲滅を終えたとのことですよ！」

「そう。じゃあ、あいつらも無事かしらね？」

瑠奈が霞ヶ関の方角を見て、微笑んでいる頃…。

「…かああっ！疲れたなあ！おいっ！」

「ほ、本当ッスね…。」

レオンとウィンは、薬莢があちらこちらに散らかっている地面に寝転んでいた。

「お疲れさまっ！」

「ん？…あ、シグナル隊長。」

「流石は 隊ね？撃破数が最多よ？瑠奈も鼻が高いんじゃない？」

「どうかねえ？あの隊長さんの性格上…」その程度、出来て当たり前よ…調子乗らない。』…って言うに決まってるあっ！」

「ふふ、似てる似てるっ。」

「ウチラの隊長さんはよお…部下を褒めるって事を知らねえんだよ。」

「そうッス！そうッス！うししし！」

「あの性格だしね？…ふふっ、あはは！」

激戦を終えたシグナルやレオン達は、皆で大笑いしていた。

こうして、密かに進んでいた政府中枢を攻撃するというクリーチャー達の企みを何とか防いだ瑠奈達…BASTARであった。

*

*

*

日本から、遙か北に位置するグリーンランド。その国の真ん中にある山岳地帯に巨大な洞穴があった。

「日本…手強い。」

「確かB A S T A Rとか言ったか？…やるではないか、あの計画を見抜くとは。」

「たかが人間さ、臆する事なんかないよ。」

「ひとまずは、どこまでやれるか静観しようではないか。」

「まだ…動かないんだね？」

「そつだ。我々が動くのは、まだ早い。」

洞穴の中から四人の男の声が聞こえたかと思うと、再びその洞穴に静寂が戻った。

「溜奈あ！いるかっ？」

「…。」

溜奈がオフィスで封魔の手入れをしていると、レオンが走って来た。

「溜奈！一緒…。」

「却下。」

「溜奈、…。」

「拒否。」

「瑠奈…」

「嫌。」

「瑠…」

「無理。」

「本当、可愛くねえなあ…。」

「早く行きなさい。」

「へえへえ！シヨックで笑うことも忘れたなんてよ？寂しいよなあ、おい！」

「！…あなたに私の何が分かるっていうの！？」

「る、瑠奈？」

「出ていきなさいっ！今すぐにつ！」

「ちよっ…わ、悪い。言い過ぎた。」

「出てけっ…！」

「わ、分かったよ…。」

レオンが渋々…オフィスから出ていくと、瑠奈は俯いた。

「私の事なんか…ほっといてよ。一人がいいの…私は。」

俯く瑠奈の頬を流れる涙。

『瑠奈。』

「あ。」

封魔の呼びかけに慌てて涙を拭く瑠奈。

「ごめん。何？」

『瑠奈。息抜きしませんか？』

「息抜き？」

『はい、息抜きです。とりあえず寮に帰りましょう。』

瑠奈は封魔に言われるがまま、女子寮に帰ると普段着に着替えて部屋を出た。Tシャツの上にジャケットを着て、下はデニムのミニスカートという服装で瑠奈は女子寮の入り口に立っていた。

「ん？…！…！」

私服姿でメインビルへ歩いていく瑠奈を見つけたウインは、赤面しながら見つめていた。

「た、隊長ツスカあ！？」

「ウイン…！…そうだ。」

「は…はいつ！な、なんツスか？」

「私の服装…可笑しくないかな。」

「い、いえっ！めっちゃくちゃ可愛いツス！！」

「そ、そんなに動揺しなくても…やっぱり、私が女の子らしい服装でいるのは可笑的いか…。」

「と、とんでもないツス！！本当、可愛いツスよ！」

「あ、ありがとう。」

ちよつとだけワインに微笑むと、瑠奈はメインビルへ向かった。

「やた…いやったあ！！隊長が俺にだけ微笑んでくれたツス！…
ああ、もう一生お供するツス。」

ワインが天に感謝し、拜むなか…瑠奈は和田教授のいる研究室へ向かった。

「玲子教授。」

瑠奈は研究室に入ると、和田教授がいないか…辺りを見回した。

「今の声は瑠奈？…あらあ！普段着なんて珍しいわねえ？」

「た、たまには服を変えて息抜きをしたらどうか？…て、封魔が言うから。」

赤面しながら説明する瑠奈を見て、教授は優しく微笑んだ。

「そうね！で？今日はどうしたの。」

「封魔のメンテをお願いしたくて。この前初めて、正宗使ったから。」

「分かったわ、待ってなさい？」

「はい。」

二人が会話をしていると、シグナルが書類を持って研究室にやって来た。

「失礼しま…えっ！瑠奈あ！？」

「シグナル…。」

シグナルはソファーに座っている私服姿の瑠奈を見るや、笑顔で走って来た。

「可愛いよお！瑠奈。」

「あ、ありが…とう。」

「シグナル？…瑠奈が恥ずかしがってるわよ？」

「あ、そうそう！玲子教授、ウチの隊で試験運用していたプロテクターについてのデータです。」

「ありがとう。使い心地はどうかしら？」

装備について検討する和田教授とシグナルを見て、瑠奈は心配そうに俯いた。

（みんな…私がこういう姿でいるのって似合わないとか、思っていないのかな？）

瑠奈は二人に歩み寄ると、思わず問いかけた。

「和田教授、シグナル…あ、あの。」

「？…瑠奈。」

「ん？なあに、瑠奈。」

「わ、私…皆と会ってからこんな恰好したの初めてで…その。に、似合わないよね？こんな恰好。」

「えっ？」

瑠奈にそう聞かれ…シグナルが驚きながら和田教授に振り返ると、教授は優しく微笑んだ。

「ふふっ、他人が自分をどう見てるのか気になったのね？」

瑠奈は俯いて、静かに頷いた。教授は笑顔で瑠奈の前にしゃがむと、彼女の顔を覗き込んだ。

「大丈夫！ホントに可愛いし、似合ってるわよ？瑠奈。」

「うんうん。他人の目なんて気にしない！気にしない！」

「うん、ありがとう…シグナル、和田教授。」

夕方…。

女子寮に帰った瑠奈は、自室から夕暮れの東京を眺めていた。

『瑠奈、どうでした？』

「封魔。」

『たまには私服を着て普通の女の子に戻るのも、良いものでしょう？』

「…たまになら、ね？」

『はい。レオンのように、日々息を抜かれていますは困りますが。』

「ん？…ふふ、はははっ！」

『瑠奈？…今、変な事言いましたか？私。』

「ははは…うん、言ったっ。」

『では、どの辺りが誤っていたのか教えていただけますか？今後の参考とし、修正致します。』

「駄目！教えてあげないっ。」

『あ、もう！意地悪ですね？』

「ふふふ…あ。」

瑠奈は封魔と一緒にいる時だけ微笑んでいる自分に驚き、啞然としていた。

「私…笑ってる。」

『瑠奈？』

ピンポン！

「ん？…誰かしら。」

瑠奈はインターホン受話器を手に取ってみた。

「はい。」

《先輩！夕御飯、行きませんかあ？》

「リイナ。」

『いつてらっしゃい、瑠奈。私は部屋で待っていますから。』

「封魔。じゃあ…行ってきます。」

瑠奈は微笑みながら封魔に返事をする、私服姿のままリイナと一緒に食堂へ向かった。

その翌日…。

封魔を腰に差した瑠奈がBASTARの制服に紅い着物を羽織った姿でオフィスにやって来ると、レオンが土下座して待っていた。

「…。」

「おはようございます！井上瑠奈隊長様っ！」

「…金は貸さないわよ？」

「ギクツ！…うげっ！？」

瑠奈が、わざとレオンの背中を踏みつけて歩いていくのを見て…ウインとリイナがクスクス笑う。

「自分の意思でパチンコをやってきたんでしょう？スったお金は自分で何とかなさい。」

「隊長！そこを何とかしてくれよ！なっ！頼むっ！」

拝むレオンに瑠奈が振り向くと笑顔で呟いた。

「自・己・責任っ。」

「そんなぁ！…がつくし！」

消沈状態のまま自分の席に座り、卓上にうつ伏せるレオンを見て、やれやれ…と苦笑いするリイナ。

「じゃあ、俺はへりのメンテしてくるッス！」

「よろ〜！」

リイナが笑顔でハンカチをヒラヒラ振り、ウインを見送る。

ビー！ビー！ビー！

「3コールッス〜！」

「クリーチャー警報っ！」

《新橋一丁目にクリーチャー発見と一報あり。戦闘部隊は至急、現場へ急行せよ。繰り返す…。》

司令官であるバランの声がオフィスの中にこだまする。

「…行くわよ。」

「了解ッス！」

「はい！」

「へえ〜へえ〜…。」

瑠奈は部隊の皆と共に再び戦場へ向かった。腰に相棒の封魔を差し、逃げ惑う人々を救う為に…。

クリーチャーの猛威

季節は秋…。

夏の猛暑から解放され、涼しい朝を迎えるグラスヘイムの女子寮。

ジリリリ…

「ん…こんな早くに、私…目覚ましセットした？」

目覚まし時計を止め、瑠奈が目を擦りながら起き上がる。

『おはようございます、瑠奈。』

「おはよ、封魔。」

『今日は10:00時より隊長会議がありますから、その為でしょう。』

「…だからか。」

瑠奈は下着の上にYシャツを着ただけのラフな恰好で、冷蔵庫に行きオレンジジュースを取り出した。

『瑠奈は好きですね？…オレンジジュース。』

「これ？…昔からよ。ちよっと目を覚ましにシャワー浴びる。」

『了解しました。』

瑠奈がシャワーを浴びている頃…。

壊れたオフィスビルが立ち並ぶ東京をいつも通り出勤するサラリーマン達。

世界がどうなっているても、自分達には関係無い…。

ただ、自衛隊やB A S T A Rが戦うだけで自分達は痛くも痒くもない。

表情からそんな冷たい感じに見て取れるのが、この時代の【日本人】の姿だった。

「キヤー！」

「ん？…！？」

O Lが突然発した悲鳴にサラリーマンが振り返ると、巨大な鳥が彼の頭を掴み大空へ飛び去った。

「うわあああ！」

その場にいた大勢の人間が、連れ去られる彼を見て啞然としていた。

「な…なんだ！？今の…。」

「…ぎゃあああつ！」

「ひっ！？」

「こ、今度は…なんだ!!」

グチャッ

突如、上空からサラリーマンの目の前に落ちてきた物…それは、先程の巨大な鳥が掴んで飛び去った男の生首だった。

「う、うわあああつ!!」

オフィスビルが立ち並ぶ街で悲鳴と叫び声が飛び交った。

その頃、ガラスヘイムの女子寮ではシャワーから出た瑠奈がテレビを点け、再び冷蔵庫に向かっていた。

「…ふう。」

『目、覚めましたか?』

「まあね。シャワー浴びた後は、やっぱり牛乳よ。」

《臨時ニュースをお送りします!先程、目黒駅周辺で謎の死体が発見されたとの事です!》

テレビで緊急放送されている臨時ニュースを聞いた瑠奈の手が止まる。

「よっ…。」

テーブルの上にあるテレビのリモコンに足を伸ばして、音量を上げ

る瑠奈。

『瑠奈？お行儀悪いですよ。』

「静かに。」

お尻で冷蔵庫を閉めると、髪をタオルで拭きながら牛乳を飲み飲み…テレビの前に立つ瑠奈。

《目撃者の証言によりますと叫び声がした直後、空から突然男性の首が落ちてきたらしく。警察は殺人事件と猟奇殺人の両方を…》

「殺人？猟奇？…このご時勢に何て気楽な。」

『瑠奈、これは恐らく…。』

「ええ…十中八九、クリヤーチャーの仕業でしょうね。ちようどいいわ…隊長会議なんてかつたるいし、調査に行くとしましょうか。」

瑠奈はバランスに連絡し、隊長会議を欠席すると…部隊の面々を連れて、先程見たニュースの現場へと向かった。

キキツ！

「…よし、着いたぜ？」

「いたた…もうっ！危ないなあ！」

「俺…二、三回頭を打ったツスよ！？」

「レオン、もう少し安全運転をなさい。命がいくつあっても足りはしないわ?」

「へえへえ! わるうござんした!」

瑠奈がBASTARの車両から下りると、リイナやウィンもふて腐りながら車から下りてきた。

「ここですかあ?」

リイナが手を額に当て、日光を遮りながら上を見る。

「ビルの壁面には、血は付着してませんね。」

「殺した後に、生身の男性を落とすんなら窓ガラスや縁ふちに血痕がある筈だぜ?」

「でも、上を見ても見当たらないツスよ?」

「血は出てないわね、恐らく。」

「えっ?」

リイナ達が振り向くと、瑠奈が巨大な羽を掴んでいた。

「な…なんツスかあ!?! それ!」

「見て分からない?…羽根よ。」

「そ、そういう意味でウィンは言ったんじゃないねえ!」

リイナが瑠奈に歩み寄ると、羽根を手にとった。

「こんな巨大な羽根なら…犯人は、かなり大きい翼を持っている鳥
って事になりますね。」

「そうね。」

瑠奈とリイナが羽根を見つめていると、封魔の宝玉が光り輝いた。

『瑠奈。その羽根から微量のクリーチャー反応を感知しました。』

「えっ？…じゃあ、先輩の予想通り。」

「…犯人はクリーチャーってか。けどどよ、鳥型のクリーチャーな
んて聞いた事ねえぞ？」

「確かにそうツスね？人型以外のクリーチャーなんて初耳ツス。」

（この前の霞ヶ関防衛戦の時には、芋虫型クリーチャーがいたわね。

）

「先輩？…顔、青ざめてますよ？」

「いや、なんでもないわ？」

（あの芋虫型クリーチャーを倒した直後、辺り一面に肉片が飛び散
ったの…思い出しちゃったわ。）

「…とにかく、この羽根は証拠品としてガラス Heim へ持って帰り

ます。クリーチャー化した生物が何か分かれば、次の対処もしやすい筈ですから。」

「よろしく頼むわ？リイナ。」

「はい！」

「じゃあ、もう現場調査は終わりか？」

「ええ。あらかた、証拠品は警察が持ってたっちゃっただろうしね。」

「じゃあ、帰ろうぜえ！」

「そうツスね！」

皆がB A S T A R Rの車両へ歩いていくと、瑠奈がふと立ち止まった。

「…ん？」

「…先輩？」

「あれ…何かしら。」

瑠奈はビルの合間に、何か細長い物があるのを見つけた。

「…。」

瑠奈が気配を殺しながら静かに歩み寄ると、何か音がしていた。

クチャ…クチャクチャ…

「…封魔。」

『了解。』

鞘に手を当て柄を掴みながら近づいていくと、瑠奈はビルの合間を覗き込んだ。

「…なっ!?!」

「瑠奈っ!?!どうし!?!」

「!?!バカッ!」

叫びながら走ってきたレオンに気付き、無数の赤い目が一斉に振り返った。

「くっ!」

瑠奈が慌ててビルに身を隠すとその合間から、巨大なカラスが一斉に飛び出てきた。

「きゃあ!」

「!?!リイナ!」

リイナに駆け寄り、向かってきたカラス達を斬り倒す瑠奈。

「瑠奈!?!たかがカラス!?!」

「…その、たかがカラスがクリーチャー化したのよっ！」

「まじッスか!?!」

「本当よ!こいつら、ビルの影で人の足を食べてたわ…。」

「うえっ!」

「ひょっとしたら、まだこれらは雛ひなかもしれない!今のうちに叩いておきましょう!」

「了解っ!」

レオンが腰から拳銃を抜いて、クリーチャー化したカラスに照準を合わせた。

「ウインはリイナを連れて車につ!」

「了解ッス!…さあ、リイナさん行くッス!」

「待って!…先輩、この子達が雛ひななら親鳥が近くにいてもいいかもしれません。気をつけて下さい!」

「了解。」

リイナは瑠奈に頷くと、ウインと共にB A S T A Rの車両に向かった。

「くそったれ!」

レオンが拳銃を連射するも、クリーチャー達はいとも簡単に弾を避けていく。

「チキショー！速いなっ！」

空になったマガジンを捨ててリロードするレオンの背後に、一匹のクリーチャーが急降下して迫っていた。

「！…レオンッ！」

瑠奈が気づき、走り出す。

「んっ？」

「後ろよっ！しゃがみなさい！」

「後ろ！？…！…ぐうっ！」

瑠奈の叫びを聞き、レオンが咄嗟に屈むも間に合わず…クリーチャーの爪が彼の背中を斬りつけた。

「レオンッ！」

「く、くそったれ！」

背中を斬りつけて通過したクリーチャーを射殺した後、倒れたレオンに瑠奈が駆け寄った。

「しっかりしてっ！」

「だ、大丈夫だって…。」

レオンが瑠奈に強がって言うも、戦闘服の背中が血で滲んでいく。

瑠奈は咄嗟に、腰の無線機を手に取った。

「リイナツ！レオンが負傷っ！ウィン、車まわして！撤退するわ！」

《りよ、了解ッス！》

「瑠奈…。」

「何っ！？」

「ひ、膝枕…してくれ。」

「…嫌。」

タイヤを軋ませながら走ってきたB A S T A R Rの車が停車すると、瑠奈はレオンに肩を貸し車に乗せてドアを勢いよく閉めた。

「ウィン、出して！」

「了解ッス！」

瑠奈が叫ぶと同時に、ウィンが車を急発進させた。

「レオン、大丈夫？」

「けっ！この程度で死にやしねえよ。」

「そ…リイナ、帰ったら羽根を和田教授と一緒に解析してくれる？」

「了解です！」

「…俺の扱い、冷た。」

「あんと話しをするだけで、妊娠しちゃうような気分になるのよね。」

「ひ、ひでえ。」

「ははは！」

「ししっ！」

瑠奈達が乗った車がガラスヘイムへ向かって走っていく。そしてその正門前までやって来ると、敷地内から黒いセダンが出てきた。

「ん？…どっかのお偉いさんツスカね？」

「みたいだね？誰だろ。」

「…。」

「俺と話しただけで妊娠するって…ひでえよなあ…いじめだよなあ…。」

窓を開けた後部座席に座っている瑠奈がチラッと黒いセダンを見ると…その車の後部座席も窓が開いており、そこに座っていた若い男

と目が合った。

その男は、瑠奈と目が合うなり…ニヤリッと笑って彼女を見た。

「井上…瑠奈、か。」

「…相変わらず、笑顔気持ち悪いわね？矢崎。」

互いに呟くも聞こえるわけがなく…双方の車は通り過ぎていった。

「…警視庁の矢崎誠、か。」

「えっ？」

「隊長、知り合いツスか？」

「知り合い？勘弁してよ。気持ち悪い笑顔振り撒くから、誰かさんみたく気に入らないだけ。」

「ホント、先輩はズバツと言いますねえ！」

「ホントホント！うししっ！」

「…そのせいで泣いてるのが、若干一名いますけど。」

「やだ…幽霊じゃないかしら？」

「これ、ゼッターいじめだよな…チキショー。」

駐車場に車を止めた後、ウインの肩を借りてレオンが車を降りた。

「レオンはん、大丈夫かいな!？」

「レイチエル。」

金髪のアメリカ人が京都弁で叫びながら、担架を持った戦闘員らと一緒にやって来た。

彼女こそ、管制室で勤務しているレイチエル・ランサム管制官である。

「レイチエル、ウィンと一緒にレオンを救護室へ。」

「了解つ。」

「よろしくツス。」

「まかせとき!…あ!井上隊長。」

「…何?」

「さつき、警視庁の矢ナントカうちゅう生意気なお偉いさんが来て…今回の事件は自分達で捜査するさかい、BASTARは通常監視に戻れって言ってましたわ。」

「はあ!？」

「…矢崎の奴。捜査を妨害しに来たのね。」

「どっつします?」

「聞くだけ野暮よ…続けるに決まってるわ。」

*

*

*

「和田教授〜。」

「あら、瑠奈にリイナ。何か用？」

瑠奈とリイナが研究室にやって来ると、書類に目を通していた和田教授が笑顔で振り向いた。

「ふふふ。一緒に楽しめそうな仕事を持ってきましたあ！」

「ホント？…うわっ、大きな羽根ね？」

「はい！事件現場に落ちてました！これを…ぶっ！」

「調査してもらえますか？クリーチャー化した、カラスの羽根なんです。」

いつまでも楽しんでいるリイナの頭を掴んで、瑠奈が代わりに事情を説明した。

「なるほどね？…分かったわ、やってみましょう。」

「リイナを助手に使って下さい。教授は忙しいから。」

「あら。私はいつも暇よ？めんどくさいのは、さっさと終わらせるタイプなの。」

「じゃあ、リイナをこき使って早めをお願いします。」

「？…珍しく急かすわね、瑠奈。何かあったの？」

「警視庁の矢崎が私達の妨害に動いています。行動を制限される前に何とかしたいんです。」

「ふむふむ。確かにさっき、来てたみたいだけど…そういう事っ。」

和田教授に、瑠奈が険しい表情で頷いた。

「頼めますか？玲子教授。」

「警視庁の鑑識や科捜研の奴等と競争か…面白そうね。」

「私も頑張りますっ！」

「こっちはいつでも出撃出来るようにスタンバイしておく。リイナ、頑張って。」

「先輩…はいつ！任せて下さいっ！」

瑠奈が微かにリイナへ微笑んで、研究室を去っていく。

「先輩…。」

「さあて、瑠奈の期待を裏切らないよう…頑張りますかっ！」

「…はいっ！」

微笑む和田教授に振り向き、リイナは力強く返事した。

「…瑠奈！」

「シグナル。」

一階のロビーを歩いていた瑠奈に、シグナルが駆け寄った。

「聞いた？警視庁の矢崎が捜査を妨害しに来たっていう話し。」

「ええ、私達に關与するな…と言っていた事もね。あの自信はどこからくるのやら？」

「瑠奈…不思議に思わない？」

「…何が。」

瑠奈はエレベーターに乗ると、バランスがいる最上階へ行く為…六十階のボタンを押し、壁に寄りかかって腕組みをした。

「警視庁には瑠奈のこのリイナちゃんや和田教授のような天才がないのよ？どうやって、奴等…。」

「…！…そうか！」

瑠奈は、突然何かを察し…最寄りの階のボタンを押した。

「気づかなかった!」

「えっ? な、何が?」

「矢崎がわざわざグラスヘイムへ来た本当の目的よっ! 奴…きつと基地内に手下を潜り込ませてるわ!」

「ええっ!?!」

瑠奈の推測は当たっていた…。

リイナと和田教授が研究室で必死に解析しているなか…一人の男性研究員が、仕事をしているフリをしながら二人を監視していたのだ。避難階段をシグナルと共に駆け降りていく瑠奈。

「瑠奈っ! 待って!」

「早くっ!…シグナルの言う通りよ! 警視庁には、リイナや和田教授みたいな人材はいない!」

「だから!?!」

「わからない!?!…二人が解析したデータを利用すれば、先手が取れるじゃないっ! 結果…私達がいかに早く解析しても、奴等に情報が筒抜けである以上…先回りされて妨害されるわっ!」

「なんて卑怯な男なのっ!?!」

「急ぐわよっ！」

「了解っ！」

瑠奈とシグナルが全速力で走っていく。

「ちょっと休憩しましょうか？」

「ん〜、そうですね…喫茶店でも行きます？」

リイナと教授が席を外し、研究室を後にすると…先程の男性研究員が、二人の使っているパソコンに歩み寄った。

「さて…このデータか？」

男性研究員がパソコンを操作し始めると、警視庁へデータを転送し始めた。

「馬鹿な奴等だ、自分達で自分の首絞めやがって。」

カチャ…

「…本当、馬鹿よね？貴方。」

「！」

男性研究員の表情が一気に青ざめる。

彼が冷や汗をかきながらゆっくり振り返ると、リイナが笑顔で彼に

銃口を向けていた。

「先輩からメールが来たんです。」

リイナが開いた携帯には…【警視庁と内通してる人間、そちらに潜伏中。】…と、書いてあった。

「やるじゃない？私達の才能を逆に利用するなんて。」

「…けど、そんな策に引つかかる私達 B A S T A R R じゃありませんけどっ！」

リイナが銃口を向けたまま、パソコンのキーボードに触れた。

「このデータを転送したんだ。」

「そ、そうだ…。」

「そっか…残念だったね？」

「何？」

リイナが笑顔で Enter キーを押すと、数列が画面いっぱいに現れた直後…小さなリイナが画面上に現れた。

「なっ！？」

《ズルはいけないよ？あっかんべー！》

「…驚いたかしら？これは、私達が開発したコンピューターウイルス

スよ。」

「今頃、警視庁は大変な事になってるんじゃないですかあ？ふふふ！」

「そんな…。」

作業員がガクツと頭を下げた瞬間、研究室の扉が開いた。

「はあ！はあ！はあ！」

「リイナツ！玲子教授っ！」

「瑠奈。ありがとう、教えてくれて！」

「先輩。今、矢崎って人へプレゼントを贈ったところです。」

「プレゼント？」

瑠奈は首を傾げながら、シグナルと一緒に歩み寄ると…そのパソコン画面を見て微笑んだ。

「ふふふ。なるほど？これがプレゼントか！」

「やるわね、リイナ。」

「先輩の後輩ですから！【やられた分は、三倍返し！】…それが、私達のモットーですし！」

「ふふふ、そう！」

瑠奈は微笑むと、工作人員に振り返って彼を睨みつけた。

「さて、色々吐いてもらおうよ…。」

その頃…警視庁の科捜研では、矢崎がパソコンを操作する研究員の後ろに立っていた。

「そろそろ、グラスヘイムに潜入している者から定時連絡が来る筈。」

「

…きました。」

「開け。」

研究員が受信したデータフォルダを開くと、突然画面上に例のコンピュータウイルスが現れた。

「なっ!?!」

「ウイルスか? 味な真似を。データを削除しろ!」

「無理ですっ! 操作出来ません!」

「なにい!?!」

研究員が慌ててパソコンを操作するなか、矢崎がテーブルを勢いよく叩いた。

「おのれ…謀ったな! い…井上瑠奈っ!」

矢崎が怒りの形相で、パソコン上に映っているウイルスを睨むと…
モニターを殴り壊した。

「許さんぞ、井上瑠奈め…このままで済むと思うな！」

一方、グラスヘイムでは…スタッフが取調室で尋問を受けていた。

「今は人類同士で争っている時ではなかるうに。」

「はい…ですが、これが実状です。他国で何が起きていようと、我が身に起きなければ他人事ですから…」

瑠奈と balan が取り調べを受けているスタッフを別室から見つめていた。

「彼等はクリーチャーに対し、何の危機感も抱いていない。千葉であれほどの大量虐殺があったというに。」

「はい…。」

瑠奈が悲しそうに俯くと… balan は彼女の心境を察し、優しく抱き寄せた。

「すまなかった。当時の話しはタブーだったな。」

「いえ、大丈夫です…。」

ピピッ！

「メール?…失礼します。」

「うむ。」

瑠奈が振り返って携帯電話を見ると、レイチエルから一通の着信メールがきていた。

【先程、目黒区内でカラス型クリーチャーの目撃情報を入手。】

「!…バラン司令。」

「なんだ?」

「現在、再び目黒区にてクリーチャーが出現した模様です。至急、現場へ急行します。」

「そうか。気をつけてな?」

「はっ!」

瑠奈が廊下を走っていく。

「封魔はオフィスか…。」

オフィスに向かった瑠奈は封魔を装備し、赤い衣を羽織ると駐車場へ向かった。

「ウイン!出撃するわっ!」

「了解ッス!」

瑠奈が車の後部座席に飛び乗ると、レオンが既に車内で待機していた。

「レオン！？あんたっ！」

「どんなに止められても…俺は行くぜ？瑠奈。」

「…レオン。」

レオンが自動小銃の予備弾倉をチェックする。

「俺だつてクリーチャーには、部隊を潰された恨みがあるんだ。奴等を根絶やしにするまで休んでられっかよ。」

「…好きになさい。ウィン、出してっ！」

「了解ッス！飛ばすッスよ！」

瑠奈達がグラスヘイムを出撃し、現場へ急行すると…ぞろぞろ集まった警察官達が、次々に発砲していた。

「あつちやあ！見てらんねえなあ！？」

「ウィン、レオンを頼むわね！」

「了解ッス！」

「あん？俺は平気だつっつの。」

「強がつて…背中、血で滲んでるわよ？」

瑠奈が車内を指差すと、レオンの座っていた席の背もたれが血で赤く滲んでいた。

「！…レオンさんっ！」

「平気だ…っつてんだろうが！」

「ぎゃあああっ！！」

「！」

瑠奈達が振り向くと…翼を広げた巨大なカラスが、警察官を頭から丸飲みしていた。

「あれがつっ！？」

「犯人みてえだな…。」

「行くわよ。」

瑠奈は走り出すと、封魔を抜いてクリーチャー化したカラスに斬りかかった。

すると、クリーチャーは空へ舞い上がり…上空で旋回を始めた。

「くっ！空に！」

上空を旋回するカラスのクリーチャーを見つめ、悔しがる瑠奈。

「お、おいつ！？どンドン集まってきたねえか！？」

「じょ…冗談じゃないツスよ！？」

「…元がカラスだもの。仕方ないわ。」

瑠奈達の上空に巨大なカラスのクリーチャーが集まって来ると、八羽ほどの群れと化した。

「これは…人型のクリーチャーより厄介ね。」

《先輩！聞こえますかっ！》

「リイナッ！」

瑠奈が無線を取ると、B A S T A R Rの輸送ヘリがゆっくりと降下してきた。

《先輩。敵が遠距離ならレオンに任せましょう！》

「…けど、レオンは怪我を。」

瑠奈は振り返ると、心配そうにレオンを見つめた。

《平気ですよ！…レオン？貴方の射撃の腕なら、あんなカラス…目じゃないでしょ？》

開放された輸送ヘリの後部ハッチからリイナが顔を出すと、B A S T A R Rの支給ライフル【レナス】をレオン目掛けて投げた。

「へっ！…あたぼっよっ！」

レオンがレナスを受け取った直後、彼目掛けて一羽のクリーチャーが急降下してきた。

「！…やらせないっ！」

瑠奈がカラスクリーチャーに気付き、走り出す。

「封魔っ！第一可変形態っ！」

『了解しました。【正宗】起動します。』

「はぁあっ！」

瑠奈が横に封魔を払うと刀身が再構成し、柄が伸びた。

「正宗っ！両足にエネルギー蓄積っ！」

『了解。瑠奈の脚部にエネルギー蓄積。身体能力向上。』

「赤斗…爆走っ！！」

瑠奈は猛スピードで走っていくと、クリーチャーに向かって勢いよく飛び上がった。

「はぁあっ！」

廻し蹴りをお見舞いし、かかと落としてクリーチャーを叩き落とす

瑠奈。

「レオンッ！」

「あいよっ！」

瑠奈が叫ぶと…レオンはレナスを構え、狙撃の態勢に入った。

「俺様の本領発揮だ…しっかりその目に焼き付けろよ、瑠奈あ！」

*

*

*

「おらおらおらあ！」

レオンが次々にカラスクリーチャーを撃ち落としていく。

すると、弾から逃れる為にクリーチャーの群れが一斉に急降下してきた。

「クリーチャーは皆殺しよ…はあぁっ！」

瑠奈も飛び上がり、すれ違いざまに一羽を両断すると…踵落して、もう一羽を地面へ叩き落とした後に真上から突き殺した。

「たぁっ！」

やって来たクリーチャーのクチバシを蹴り上げると同時に胴体へ封魔を突き刺した直後、横へ切り裂いて倒し…そのまま、背後から飛んで来たクリーチャーの頭部を鞘で殴りつける瑠奈。

「…女の子を背後から襲うなんて、レオン並みに最低な奴ねっ！」

鞘で殴りつけて地面に落ちたクリーチャーの首を切り落とした後、血を払って鞘に戻す瑠奈。

「終わりッスかね？」

「…お前、何もしてなかったじゃねえか。」

《まだまだよ。》

瑠奈は空を見上げると、リイナの乗る輸送ヘリが着陸態勢に入っていた。

「リイナ。」

輸送ヘリが無事に着陸すると、リイナがミニパソコンを片手に降りてきた。

「先輩、例の羽根ですが…調査の結果、遺伝子操作された形跡があるのを発見しました。」

「…お、おい！つう事はよ、人工的に誰かがクリーチャーを造り出したって事かっ!？」

レオンが驚きながら問いかけると、リイナは険しい表情で頷いた。

「警視庁の矢崎が動いたのは、それを隠蔽する為…か。」

「恐らく…。」

「このご時世にクリーチャーを人工的に造り出すなんざ…馬鹿がする事だぜ。」

「全くツスよっ！」

「先輩、これからどうしますか？」

「そうね…。リイナ…昔この都内でカラスの被害が特に酷かった場所の探索って出来るかしら？」

「もちろんです！…けど、ここでは何ですからへりに行きませんか？飲み物とかも持ってきました。」

「了解、じゃあちよつと休みましょう。誰かさんの背中、手当てしないといけないしね？」

「！…瑠奈がしてくれんのかっ！？」

「まさか…ウインよ。」

「そうだよなあ？…おめえがそんな優しいわけねえよなあ？」

「…ふんっ。」

「！…！…いつてえ！」

レオンの足を思いきり踏みつけて、瑠奈はへりに乗り込んだ。

「ん」と、カラス…カラスと！」

リイナはミニパソコンのキーボードを操作しながら、大好きなドーナツをニコニコしながら食べていた。

《瑠奈及び 部隊の諸君、聞こえるかっ！》

「 balan司令？…こほっ。はい、こちら 部隊。」

《カラス型クリーチャーが東京各所に現れたっ！全部隊が迎撃に向かっているが、 部隊も至急合流し…迎撃に加われっ！》

「了解しました。」

「…先輩、ゆっくりしてる暇はないみたいですね？」

「頼むわ…英才リイナ・カーディガル。」

「お任せを！」

くわえていたドーナツを口に入れて、リイナがパソコンと睨みあった。

「さあ、いきますよ〜？」

リイナが猛スピードでキーボードを操作していく。

「相変わらず、タイピング速えなあ…。」

「見つけたっ！かつて、東京都にあったカラス三大ねぐらっ！」

「速いッス！」

「どっっ！」

「現在、残っている三大ねぐらは…！…！…！明治神宮ですっ！」

「北かつ！」

「お見事よっ！リイナ！」

「へへへ〜！」

「レオンはウィンとヘリで空中から狙撃！私は陸路で現場に向かうっ！」

「でも先輩？車、誰が運転を…。」

「…！決まってるじゃない。」

リイナの肩に手を置く瑠奈。

「わ、私ですかあ！？免許ありませんよ、私っ！」

「大丈夫よ。二つあるペダルのどちらかを踏めばいいだけなんだから。緊急事態だし、車体傷つけてもクリーチャーにやられたって伝えればオッケーよ。」

「む…無茶苦茶な。」

「わ…わかりました！やってみます！」

「よろしい！…それじゃ、隊総出で大暴れするわよっ！」

「了解っ！！」

瑠奈達が行動を開始した頃…。

東京の至るところで、銃声と悲鳴が響き渡っていた。

「くっ！」

シグナルがマガジンをリロードすると、空から迫るクリーチャーに連射した。

「隊長、後ろっ！」

「！」

シグナルは、しゃがんで腰に装備していたコンバットナイフを握ると…振り向きざまにクリーチャーを斬り裂いた。

「臆しないっ！攻撃の手をゆるめないで続行っ！」

「了解ですっ！」

「数が多すぎるわ。このままだと…ん？」

汗を拭うシグナルの頭上を、【 】と機体下部に描かれた輸送ヘリが明治神宮方面に飛んでいった。

「あれは…！…ふふふ！心配しなくても平気かな？皆っ！気合い入れていくわよ！」

シグナルは 部隊のヘリにウイंकをすると、部下と共にクリーチャーを迎撃する為…戦場に向かった。

「間もなく、明治神宮上空ですっ！」

「サンキュー、運ちゃん！」

レオンは自動小銃とレナスを担ぐと、開放した後部ハッチで身構えた。

「レオンさん！？危ないツスよ！」

「反撃しねえで、そのまま乗っていた方がよっぽど危ねえよっ！」

猛スピードで滑空してくるクリーチャーに、照準を合わせるレオン。

「さあ、パーティーの始まりだぜえ！」

自動小銃とレナスを脇に挟むように構え、レオンが四方八方にいるクリーチャーへ連射する。

「レオンさん！狙撃しろって、隊長が言ってなかったツスカ!？」

ウィンも慌ててレオンの横へ駆けつけると、自動小銃を連射し始めた。

「固いことは気にすん…なっ！」

レオンは迫ってきたクリーチャーの頭を全力で踏みつけてハッチに叩き落とすと、頭をレナスで撃ち抜いた。

「レオンさん！？そんな事したら、ハッチに穴が！」

「ちっ！弾切れかよっ！？ライフルだし、仕方ねえか！」

レオンはレナスを機内へ投げ捨てると、自動小銃を両手で構え…連射を再開した。

「数が多い！」

「このままじゃあ！」

「弱音を吐く暇があんなら、一発でも多く弾を撃て！…ん？」

レオンがウィンへ叫んだ瞬間…輸送ヘリの周囲を、赤い真空波が次々と通過してクリーチャーを消し飛ばした。

《…レオン？私の分の獲物は、とっといてくれるかしら？》

「！…レオンさんっ！」

「ああ！…クリーチャー、覚悟しやがれっ！てめえらの天敵が到着だあーっ！」

横から飛んで来たクリーチャーの首を掴み、レオンがニヤついて言う…その「クリーチャーの頭を撃ち抜いた。

地上を駆ける一台の車…。

その車の上には、封魔を持った瑠奈がサンルーフに足を引っかけて体を固定し、仁王立ちしていた。

《瑠奈、心配すんな！うじゃうじゃいるぜっ！！》

「了解っ！…リイナ？」

《は…はいっ！》

「怖くなったら、すぐに逃げなさい？」

《初めて&無免許運転だし…色んな意味で今にも逃げ出したい気分ですう！》

瑠奈が運転席の真上で微笑むと、上空からカラスのクリーチャーが次々に迫ってきた。

『瑠奈、このエリアだけでもクリーチャーの総数が五十を超えています。』

《そ、そんなあ！？》

「…面白いじゃない！クリーチャーを一羽残らず殲滅するわよ！」

『了解しました。では瑠奈：敵の総数が多い為、薙刀型可変形態【青龍】の使用を推奨します。』

「了解！任せるわっ！」

『了解しました。薙刀型可変形態【青龍】、起動します。』

宝玉が光り輝き、刃が分解されると：瑠奈が伸ばした柄が更に伸び、その鍔から厚く反り返った刃が再構築され姿を現した。

瑠奈は封魔を掴むと、頭上で振り回し身構えた。

「これが：青龍。」

『クリーチャー、前方及び右上部より接近。』

「はあっ！」

瑠奈は前方から迫るクリーチャーを頭から一刀両断すると、バック転して通り過ぎようとするクリーチャーの首を封魔で斬り落とした。

「見た目より軽いし、扱いやすい：うん、これならいけるっ！」

瑠奈は封魔でクリーチャーを薙ぎ払いながら、ねぐらを懸命に探した。

「早く巢を：元凶を断たないと！これ以上増加させる訳にはっ！」

『：瑠奈あ！右手前方にある林の奥に、でっけえ穴が開いてやがら

あー！』

「きゃあ!…レ、レオン!? ありがたいけど、無線で叫ぶなっ! 耳が痛いっ!」

《うおっ!?! お…おめえもなあ!》

「…馬鹿。」

『瑠奈。青龍形態時は柄を分割することにより、双剣【双龍剣】にもなります。』

「本当!?!…お願いっ!」

『了解しました。【青龍】を分割、【双龍剣】起動します。』

厚い反り返った刃が消えて柄が二つに分割されると、同じく二つに分割した鍔が両方の柄の先端に結合し、刃が再構築された。

瑠奈は両手に双龍剣を握って走っていくと、またしても空中からクリーチャーが迫る。

「邪魔あつ!」

瑠奈はクリーチャーを斬り裂くと、横から噛みつきごとと飛んで来たクリーチャーに双龍剣をくわえさせた。

『背後からクリーチャー1っ!』

「!…はああつ!」

瑠奈が回転斬りを放つと、直刃と真空波で周囲のクリーチャーが次々と斬り裂かれた。

「穴はまだっ!？」

瑠奈が林を抜けると、地面に巨大な穴が開いており…そこから次々にクリーチャーが飛び立っていた。

「見つけた!…けど、どうやって塞ぐ!？」

《先輩っ!私の運転してる車を穴に落とします!それを爆発させましょうっ!》

「リイナ!？」

瑠奈が振り返ると、B A S T A Rの車両が林の中から猛スピードで飛び出てきた。

「整備士さん…ごめんなさいっ!」

リイナが飛び降りると、車はそのまま穴に突っ込んでクリーチャーの元凶を断った。

「いたたた…先輩っ!」

「了解!…レオン、燃料タンク撃ち抜いて!」

「あいよ!」

輸送ヘリの開放された後部ハッチから、レオンが自動小銃で狙いを

定める。

「最後の一発だ…当たれよっ！」

レオンの撃った弾が車の燃料タンクに命中すると、大爆発を起こした。その爆発が生じた灼熱の炎は巣穴全体に広がっていき、親鳥ごとクリーチャーを焼き尽くしていった。

黒煙が上がる巣穴を笑顔で見つめる、瑠奈とリイナ。

上空を旋回中の輸送ヘリでは、背中を痛がるレオンにウィンが肩を貸して地上の二人を笑顔で見つめていた。

「終わりましたねえ…。」

「…じゃ、帰るわよ?」

「えっ?…ですが、未だカラス型のクリーチャーは東京各所に残ってますよ?」

「私達は、ねぐらを潰したのよ?掃討は、シグナル達に任せましょつ。」

「先輩…ははっ、了解ですつ。」

瑠奈はリイナに手を貸し、立たせると…降下してきた輸送ヘリに歩いていった。

翌朝…。

皆が朝食をとり、食堂へ向かう道を、一台のBASTARの車が猛スピードで駆け抜けていった。

ダダダダ…

「る、瑠奈の奴う！」

シグナルは車を飛び降りると、汚れたままの格好で食堂の中へ駆け込んだ。

「瑠奈あ！いるでしょ！？返事なさい！」

「…朝から何、シグナル。」

シグナルが瑠奈を見つけ…怒りながら歩いてくるも、瑠奈は物静かに朝食を食べていた。

「瑠奈：貴女ねえ！？いくらクリーチャーの巢を叩いて増加を防いだって言っても、直ぐ様部隊を退かなくてもいんじゃないかしらあつ！？」

「…。」

「私達とで何とかクリーチャーを殲滅し、ついさつき帰ってきたのよ！？ついさつき！」

「…お疲れ。」

「瑠奈っ！何か言ったらどうなの！？」

「…。」

「瑠奈っ！」

シグナルが執拗に問いかけると、瑠奈は食事をしながら…ゆっくり口を開いた。

「日本支部が有する、全戦闘部隊がクリーチャーの迎撃に出ているあの状況で…万が一、他のクリーチャーの目撃情報がグラスヘイムにあった場合…どうする気？」

「え…。」

きよとんとするシグナルに、瑠奈が振り返って話しを続けた。

「そんな事になったら、確実に前線の指揮系統が混乱するわよ。そして各部隊の連携が崩れ、いつの間にか優勢から劣勢に陥ってしまう…なんて事にならないようにしたの。」

瑠奈は食パンのみみを残して朝食を終えると、トレーを持って席を立った。

「【戦は、相手の心を攻めるべし。】…と古代中国の軍師『諸葛亮孔明』は言ったわ。それは今の私達にも言える事よ。いくら、装備や腕が良くても精神面をやられたら本調子を出せずに負けてしまうわ。」

「…ちよい待ち。」

シグナルが去ろうとした瑠奈の襟を、しっかりと掴んだ。

「瑠奈あ？正直、言いなさい？」

「…。」

「先輩？逃げられないみたいですよ？」

瑠奈の隣で食事中のリイナが食べながら言う。

「めんどくさかったんでしょ、瑠奈。」

「…リイナ！食器、片付けておいて！」

瑠奈はゆっくりシグナルに振り返り、ニコツと微笑むと…リイナにトレーを渡し、走って逃げた。

「やっぱり、凶星かあ！！瑠奈あ！」

「ちよっ…先輩！？」

シグナルが怒鳴りながら追いかけていくと、リイナは慌てて振り返って…逃げていく瑠奈を見つめた。

「先輩…やれやれ。」

リイナは苦笑いしながら、フォークでウィンナーを刺した。

「今日は平和みたい。ふふふっ！」

「待て、瑠奈あ！」

「!…あっ！シグナル！あれ、あんたの好きなアイドルグループ「トウモロ」じゃないっ!?!」

「えっ!?!どこよっ!?!どこっ!?!」

「あそこよっ!?!…あそこっ!?!あそこっ!?!」

シグナルが周囲をキョロキョロしているうちに、瑠奈はメインビルに向かって走っていった。

「いないじゃない…!?!というか、いるわけないじゃない!?!瑠奈あ、どこ行ったあ!?!」

「相手の心を攻める…か。確かに効果あるかもね?」

『かつての偉人も、瑠奈には敵いませんね?』

「当然っ。ふふふ!?!」

秋風が吹く中…瑠奈は笑顔で、ガラスヘイムのメインビルへ走っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0570ba/>

BASTAR ~ 闇を狩る者 ~

2012年1月6日17時52分発行